

# 道 頓 堀

第九年第三號

初代實川延秀

追善興行

初代實川延秀

白屋

之



昭和九年三月八日出版  
第一號  
每冊一圓

ぎ防を病る入りよ口  
るすに快爽を神精

錠口生衛

劑菌殺中口



仕奉大し炭拂額全  
如即は込申添口

好幾国び來らす

驚異的の大計畫更に廿万個追加  
御買上の方全部

本舗 株式会社安藤井筒堂藥品部

東京市日本橋區水天宮前

お買求めの  
カール空函 (拾錢貳拾錢に限り上  
包の効能書を卅錢五  
十錢一圓は空函)

全額拂戻 本舖安藤井筒堂藥品部へお送りになれば  
直ちに同額のカールを進呈致します

全額拂戻 二十萬個限り但し廣く御愛用の皆様にご  
總 數 の御利益を得て頂きたい爲め御申込は一  
人一個限り

御注意 空函、効能書の御郵送は必ず四匁毎に三  
錢切手貼用下さい不完未納は受けませ  
ん

風味必ず御意に召す

天ぶら御料理

季節日本御料理

# 芝居情緒と食道楽 喜久屋食堂

道頓堀戎橋北詰

御芝居歸りには打揃ふて

是非お坐席で御會食を！

大阪支店

喜久屋均一店

心齋橋筋二丁目

菊

屋

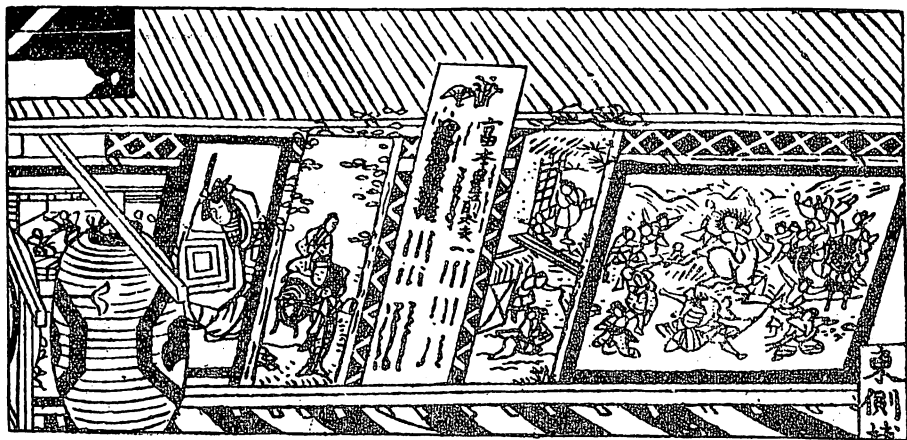
北新地裏町

京都支店

喜久屋京都支店

四條木屋町下ル





東側林

◇道 頓 堀。 昭和九年三月號。 第九十輯 ◇

★ 繪 口 ★

◎三月の歌舞伎座▽南部坂▽鷹治郎の内藏助、延若の一角、梅幸の後室、魁車の局▽安宅の關▽延若の辨慶、福助の義經、羽左衛門の富樫▽極彩色尾形書襖▽福助の光琳、魁車のお石、訥子の乾山、延二郎の右京、延之助の左京、延若の關白▽源氏店▽羽左衛門の與三郎、梅幸のお富、延若の編蝠安▽弘法大師▽鷹治郎の空海、右衛門の文室▽小三金五郎▽魁車の新十郎、延若の金五郎、福助の小さん▽其小唄夢郎▽羽左衛門の權八、梅幸の小紫▽壽生立會我▽延二郎の十郎、延之助の箱王▽道行初音旅▽羽左衛門の忠信、福助の浪回松竹座▽春のお重▽夢みたいた話▽十吾の文三、東の女中▽日の丸の子▽小織の朝田、山田の勝造、石河の甲子▽人形箱▽十吾の父、天外の伴、高田の弟▽さくら音頭▽小織の長谷川、十吾のおふみ、天外の欣一、石河の歌之助

★表紙 初代延若の髮結金五郎……………(歌舞伎座上演)  
★扉 鷹治郎の弘法大師(スケッチ)……………(歌舞伎座上演)

延若と宗十郎……………高安吸江(三)

初世延若と翻譯劇……………大橋孝一郎(六)

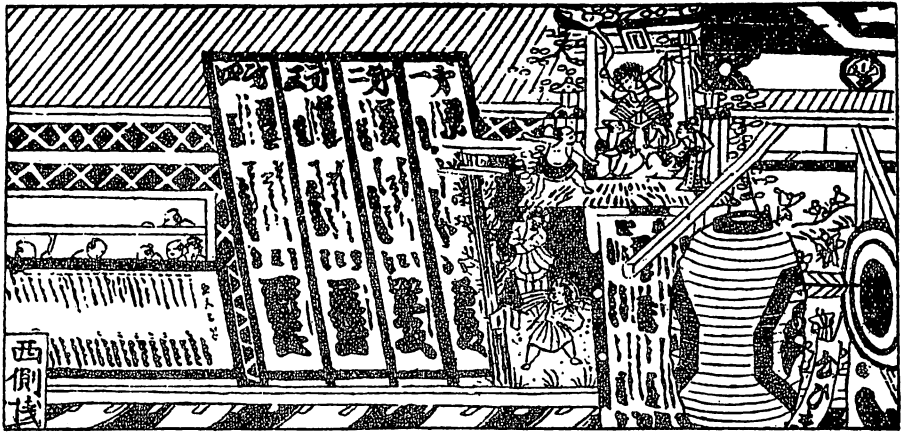
色と香と味の三拍子……………本山荻舟(九)

延若の延二郎時代……………辻田公紀(三)

初代實川延若年譜……………高谷伸(四)

弘法大師……………大澤休像(三)

切られぬ與三……………富田英三(三)  
してやられた編蝠安……………大槻たもつ(三)  
與三郎の商賣……………



## ジープのガン

酒場「源氏店」	秋田收一 (三七)
安宅	關
吉野山後日譚	酒井七馬 (三三)
辨慶の似顔繪者	大槻たもつ (三二)
エロ間	山崎喜一郎 (三〇)
弘法大師	關
風邪をひいた辨慶	富田英三 (三五)
賈廢兵	酒井七馬 (三五)
初代延若漫畫日記	妹脊平三 (二六)

芝居	上田啓一郎 (二六)
物語	弘法大師

春の外國映畫街を行く	太宰行道 (三三)
續 街頭で拾った話	會我廻家十吾 (二五)

### 劇壇 評論 實川延若を語る

創意と近代的感覺	西田眞三郎 (二六)
延若君	坪内士行 (二九)
延若を語る	菱田正男 (三〇)
延若雜話	西尾福三 (三〇)
初舞臺の實川延二郎と實川延之助	西田眞三郎 (二九)
名題昇進の實川實三郎	西田眞三郎 (二九)

★名 齋 詞 集 (歌舞伎座上演劇) (三七)

★歌 舞 伎 座 狂 言 案 内 (三〇)

★編 輯 後 記 (二六)

田 中 滿 彦 (二六)

天下の銘酒

シ  
ラ  
ユ  
キ

# 白雪

灯かけ  
仇めく  
色毛氈に  
心ときめく  
白雪の酔

榎本伊丹雄

小西酒造株式会社

「南部坂」

大石内藏助

◇夜の部◇

中村鷹治郎



◇初代延若追善興行◇

◇三月の歌舞伎座◇

◇ 初代延若追善興行 ◇ 東西合同大歌舞伎 ◇

『南部坂』

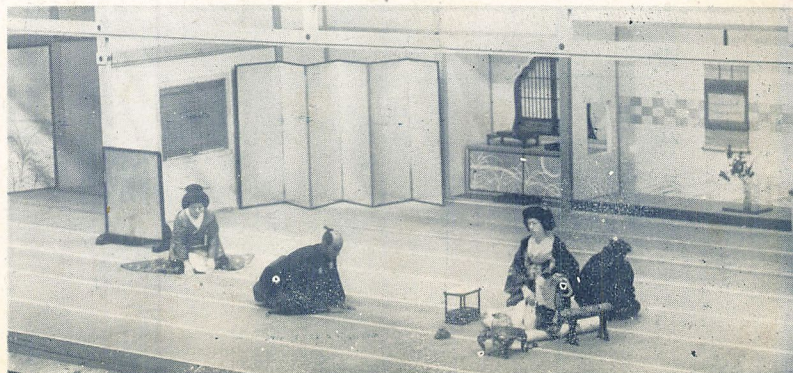


清水一角 實川延若  
大石内藏助 中村鷹治郎



後室瑤泉院  
戸田の局

尾上梅幸  
中村魁車



三月の歌舞伎座

... ..  
... ..  
... ..  
... ..  
... ..  
... ..  
... ..  
... ..



アングロス并ス

ミルクチヨコレート

コーヒキヤラメル

チヨコレート

キヤラメル

チヨコメル

大阪市東區豊後町三番地

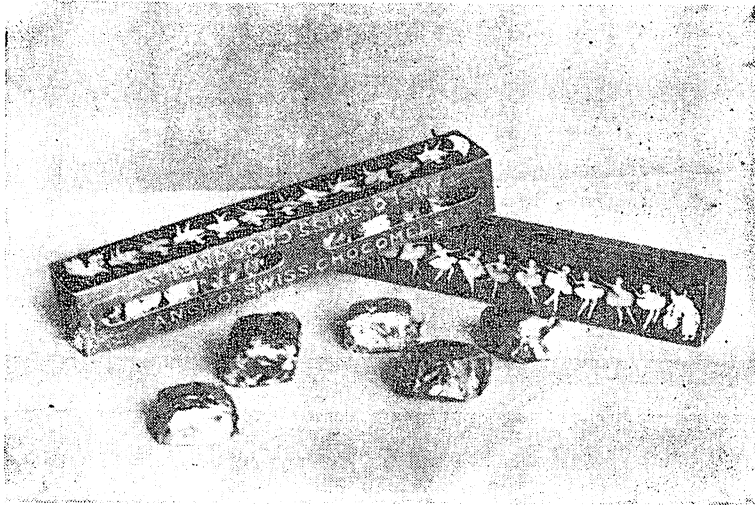
發賣元

株式會社

横山商店

電話東(94)

四二一  
六〇六  
四一六  
九三番



佛 國 巴 里

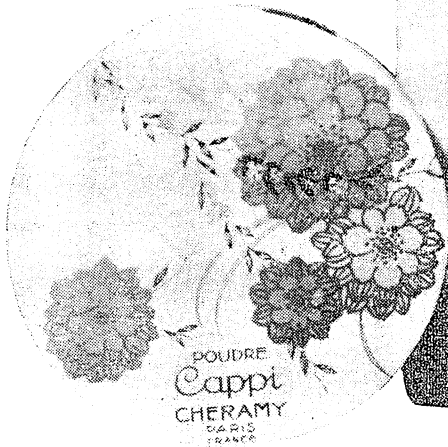
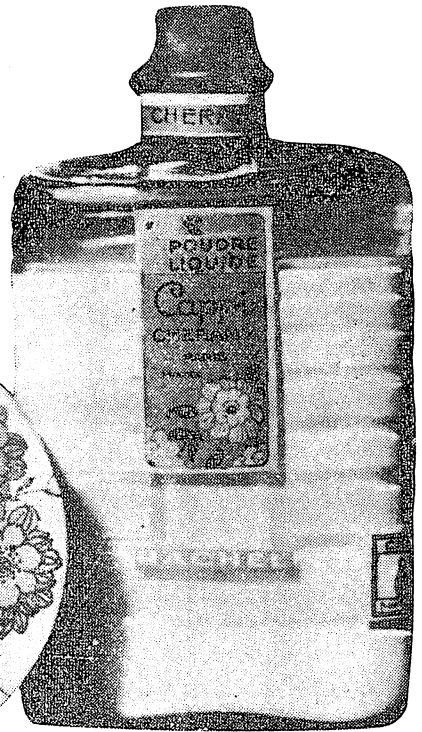
# カ ツ ピ ー

水 白 粉

(白・肌・オークル)

粉 白 粉

(白・肌・オークル  
時・眞珠・色)



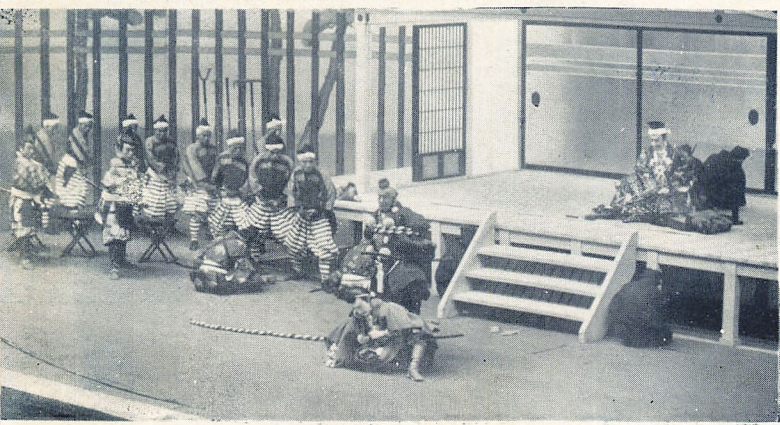
佛 國 巴 里 卡 ン 本 街  
セ ラ ミ ー 化 粧 品 會 社

## CHERAMY PARIS

◇ 初代延若 追善興行 ◇ 東西合同大歌舞伎 ◇

『安宅關』

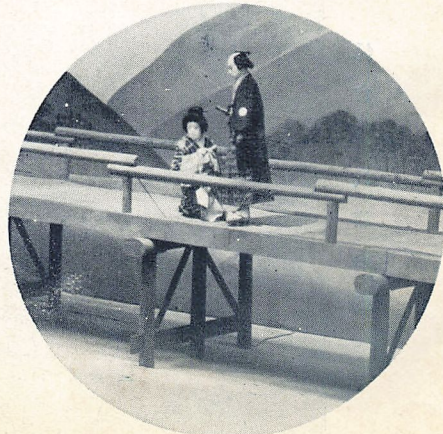
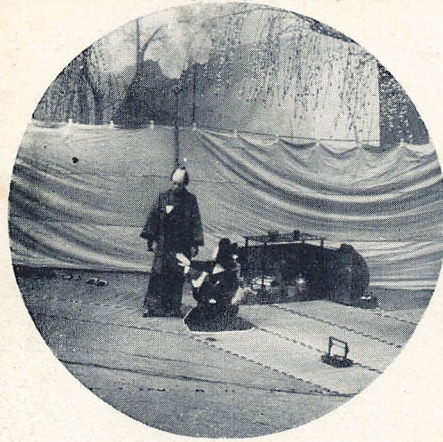
武藏坊辨慶	實川延若	富樫之介	市村羽左衛門
源判官義經	中村福助	伊勢三郎	嵐橋三郎
里の子	實川延二郎	駿河次郎	中村霞仙
里の子	實川延之助	片岡八郎	中村成太郎



『襖畫形尾色彩極』

左	右	乾	二條	お	尾形
京	京	山	條	石	光琳
延	延	澤	白	中	中
之	二	村	實	村	村
助	郎	訥	川	魁	福
		子	延	車	助
			若		

◇ 畫の部 ◇



三月の歌舞伎座

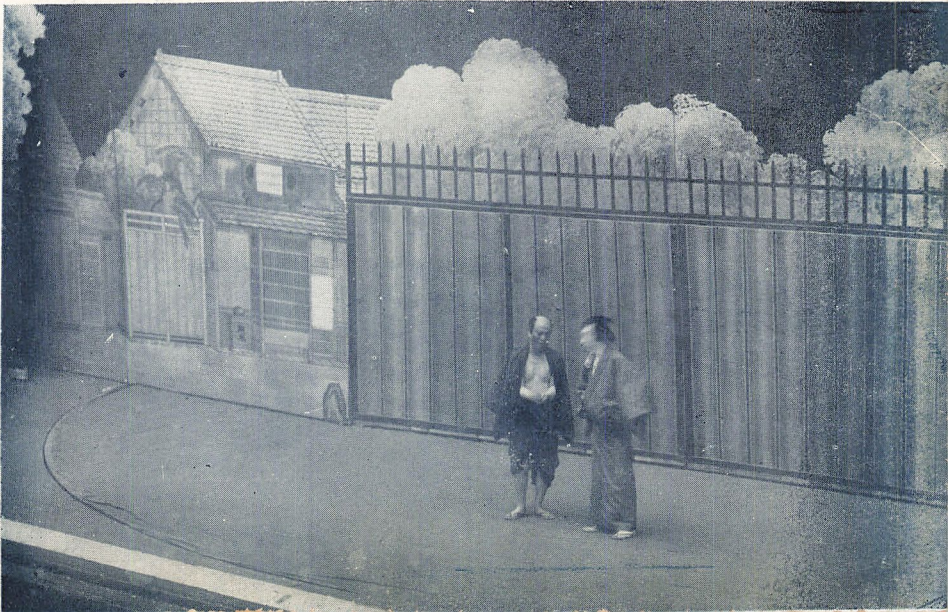
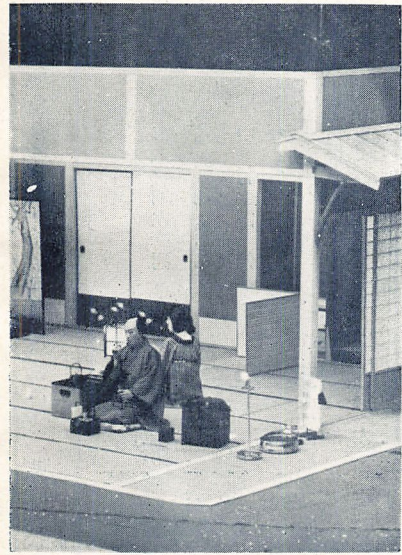
『世話情浮名横櫛』

向 痕 與 三 郎 市 村 羽 左 衛 門  
 妾 お 富 尾 上 梅 幸  
 編 蝠 安 實 川 延 若  
 多 左 衛 門 澤 村 訥 子



◇ 行 興 善 追 若 延 代 初 ◇

◇ 部 の 夜 ◇



録 倉 源 氏 店 の 場

三月の歌舞伎座

妾お富 尾上梅幸



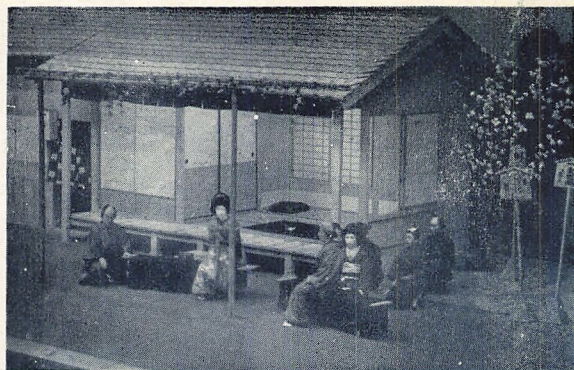
東西合同大歌舞伎



『弘法大師』

空海  
文室綿麿

中村鴈治郎  
市川右團次



『小三金五郎』

―福屋離座敷の場―

東西合同大歌舞伎

初代延若追善興行

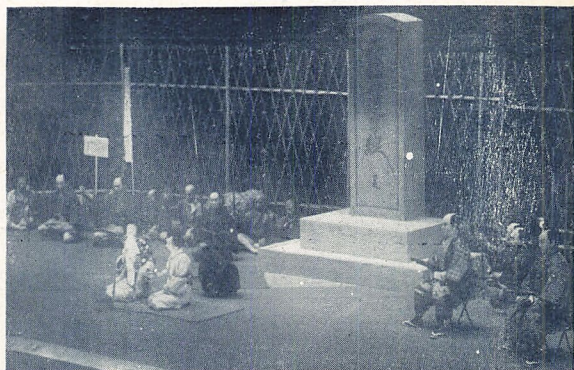
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…  
…



『小三金五郎』

―勝曼坂の場―

小 さ ん	金 五 郎	新 十 郎	お お 縫	娘 お 崎	お 糸
中 村 福 助	實 川 延 若	中 村 魁 車	市 川 延 女	實 川 延 太 郎	中 村 成 太 郎



『權八 其小唄夢廓』

―鈴ヶ森仕置の場―

白井權八 市村羽左衛門  
三浦屋小紫 尾上梅幸



行興月三座伎舞歌

―新吉原仲の町の場―

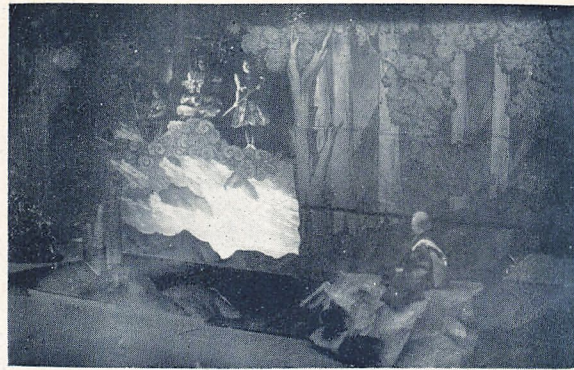
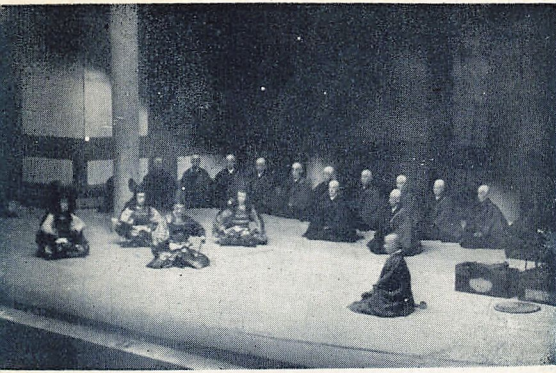
◇ 初代延若追善興行 ◇

東西合同大歌舞伎

空海 中村 鷹治郎  
 坂上田村麿 中村 魁車  
 文室綿麿 市川 右團次  
 紀清成 中村 霞仙

・ 晝の部 ・

◇ 弘法大師 ◇



『壽生立會我』

― 箱根權現裏山の場 ―

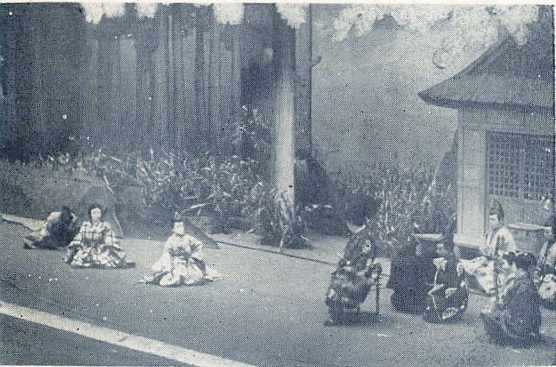
・ 夜の部 ・

曾我十郎 實川延二郎  
 同 箱玉 實川延之助

『壽生立會我』

― 箱根道地藏堂の場 ―

箱根權現別當 實川 延若  
 不動明王 中村 福助  
 狛羅童子 林 長三郎  
 制吒迦童子 澤村 訥子



『道行初音旅』

忠 信 市村 羽左衛門  
 靜御前 中村 福助

歌舞伎座三月興行



◇ りごおの春 ◇



(右  
上  
よ  
り)

第一景 櫻の花道

第三景 春に囀る

第二景 光る七色櫻

第四景 さくら音頭



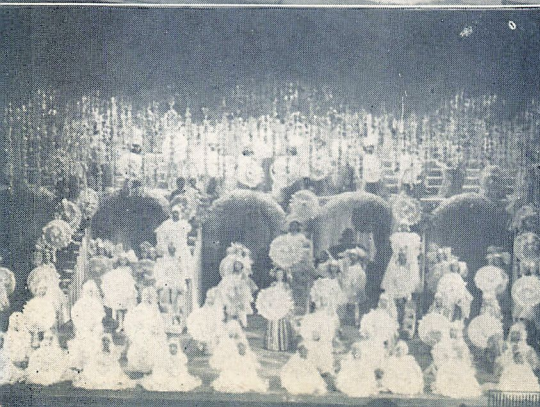
玉船風の春景四第(上)

る朧月景三第(中)

サーボンボ景五第(下)

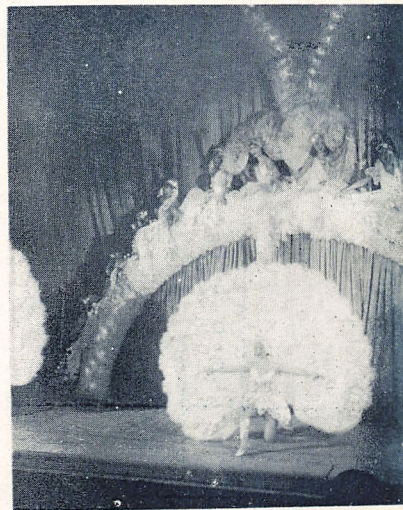






(左上より)  
 第六景 ラーヴイ・ヴランタニエル  
 第七景 クリーム・ピユータイ  
 第八景 白孔雀  
 第八景 櫻咲く國

◆ 演上座竹松 ◆



ルエニタラヴ・イヴーラ 景六第 (上)  
 雀 孔 白 景八第 (中)  
 國 咲 櫻 景八第 (下)



『バック・O・K』

お重 豊子  
西村啓太郎 倉

春野音羽 浪花千枝子  
澁谷天外 村田満智子



三  
月  
の  
中  
座

『夢みたいな話』

海野文三 曾我廼家十吾  
女中とよ 東 愛子

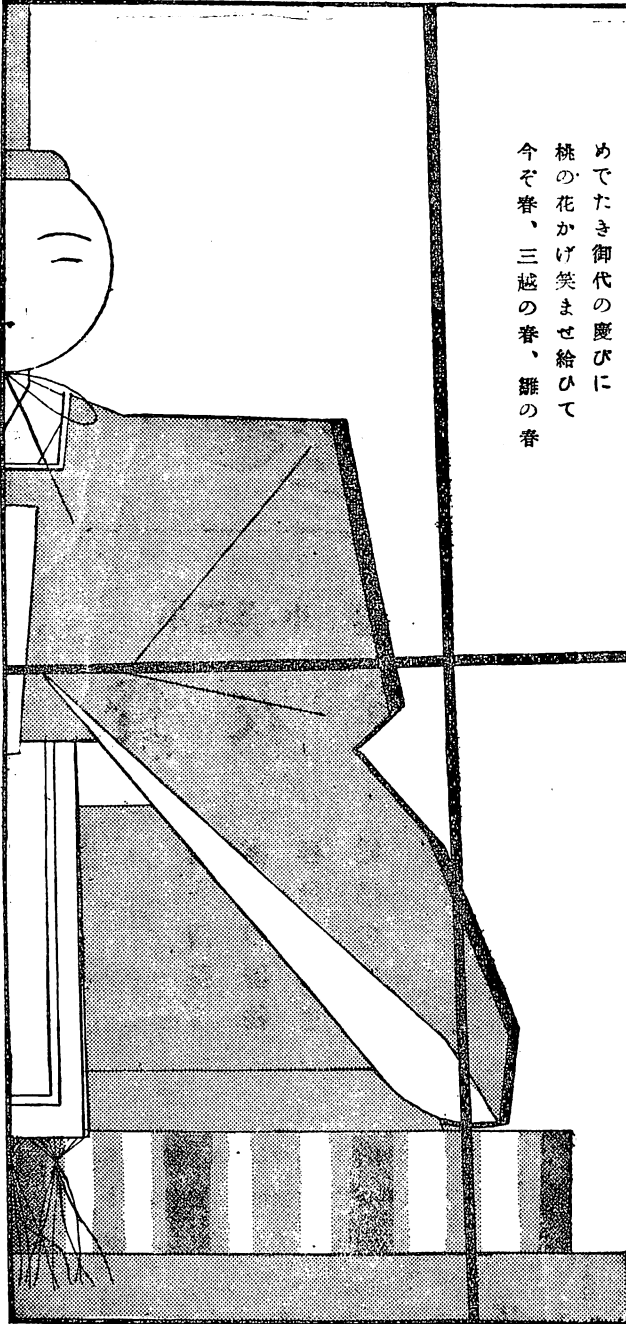


◇松竹家庭劇◇

— 二の替り —

女中とよ 東 愛子





# 三越の雛人形陳列

東館六階

雪洞の灯影にゆるゝ、  
雅び床しき内裏雛  
めでたき御代の慶びに  
桃の花かけ笑ませ給ひて  
今ぞ春、三越の春、雛の春



## 三越

◆大阪◆



裂 小・具道小

# 貸衣裳

素人演藝會  
宴會の催物  
春秋温習會  
婚禮の衣裳

# 松竹衣裳部

本店  
東京支店

大阪市浪速區南畝町松竹ビル内  
電話 戎 五 六 三 四 番  
東京市淺草區駒形町二十三番地  
電話 淺草 六 六 六 一 番

其他一般の衣裳に少多に不拘御利用  
さぐり便に應じ談相御の客來御いさ  
すまし致ひら計取お

「日の丸の子」

朝田清兵衛  
 良吉  
 孝介  
 次男勝造  
 娘静子  
 妻里子

小織桂一  
 山口輝夫  
 山谷清一  
 田川隆也  
 石田京薰  
 河子



「日の丸の子」

里子  
 石河薰  
 德子  
 東愛子

◆松竹家庭劇◆

二の替り



三月の中座

「人形箱」

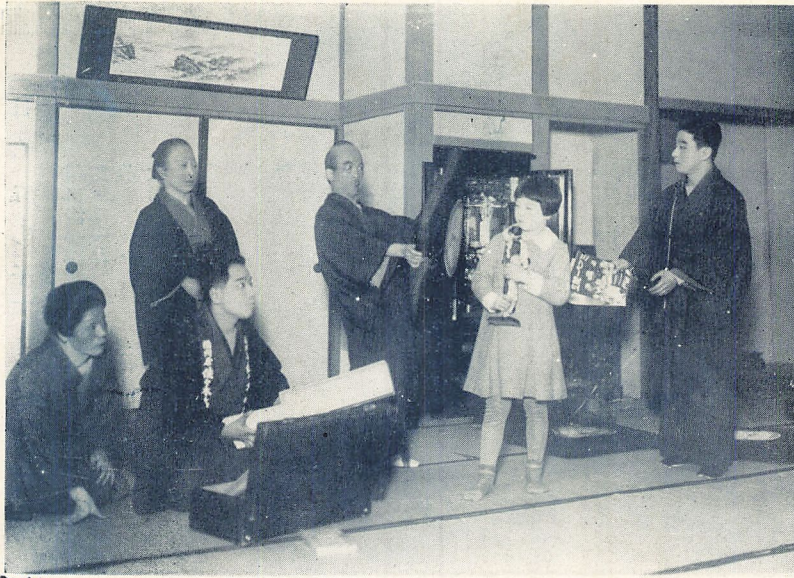
父市兵衛 曾我廼家十吾  
 作 一郎 澁谷天外



「人形箱」

弟次郎 江文江  
 父市兵衛 曾我廻家十吾  
 兄一郎 曾我廻家天照  
 伯母お米 曾我廻家天照  
 母安江 曾我廻家天照

高田京子 石田家十吾  
 曾我廻家天照 曾我廻家天照  
 曾我廻家天照 曾我廻家天照



「さくら音頭」

長谷川修太郎 妻 お芳  
 おふみ 長谷川欣一  
 藝妓 歌之助

小織桂一郎 春野音羽  
 曾我廻家十吾 澁谷天外  
 石河 薫



◆ 松竹家庭劇 ◆

二の替り

三 月 の 中 座

新與キネマ陽春豪華時代篇

# 天保水滸傳

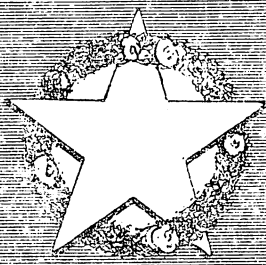
“ 闘 ぶ 勢 力 ”

原 監 撮 作 督 影  
山 松 三  
上 田 木  
伊 田  
太 定  
郎 次 稔

月形龍之介  
森 靜 子  
主演



河津精三郎  
松本泰輔  
歌川八重子  
德川良子  
共演



中華人民共和國  
 成立二十周年紀念  
 全國人民  
 慶祝  
 十月革命  
 四十周年紀念

中國人民日報  
 社論

慶祝十月革命四十周年紀念

一九五九年十月一日



藝雜·究研劇演·刊月

三月號

# 通類編

第九年

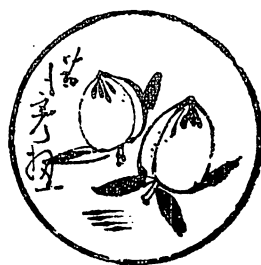
第十九輯



弘法大師

空海  
中村厚治郎

一九三〇年  
三月  
弘法大師の  
像



# 延若と宗十郎

高安吸江

明治十八年の夏未曾有の大洪水が大阪を襲ひ、市の誇であつた大川の三大橋もスツカリ押し流されてしまひましたが、その一つの難波橋のあとへ珍らしい船橋が架けられました。

恰度その頃です。その北詰の高橋病院へ入院しやうと此橋を渡つた先代河内家延若が、丈夫な橋の落ちたのと人生のはかないのと思ひ合せて落涙しました。虫が報らせたとも云ふのでしやう、それから間もなく容態が悪化し、終にその九月十八日に死去したのです。

今度此優の五十年記念劇が演ぜられさうですが、徳川末期の名人凋落期の後に新時代の勃興機運の魁をなした我が大阪の二名優、中村宗十郎と此延若正鴈、よしそれが短命の爲め目立つた効果を残すことが充分でなかつたとは云へ、少くとも大阪歌舞伎の湮滅を防いで其存在

を確實にした功績は否むべからざるものでありまから、私は此企を有意義ならしめたいと心から祈つてをります。

故二代目額十郎門人

實川延若

俳名

正鴈

初名 延治 又は 延治郎

江戸へ行て芝術門人となり中村延雀と改、又四代目菊

五郎の養子となり梅亭と云ふ、其後大阪へ歸り延若と

改名す、當時一方の座頭なり。

養子延治郎(早世)

小若

門人正朝 鴈正、若鴈(外十七名)

此れは明治十二年二月改正の三府俳優大系圖に記され  
てあるのですが、評判記を續つて見ると天保十年(外題  
撰)には位附もない二段の中に實川延二とし、同十一年

には角衆娘方子役の部に實川延治とあるのが始まりらしく、恰度九ツか十歳位（天保二年生れですから）に當りますが、實際舞台に立つたのがいつやら明ではありません。見立番附では天保十三年の分に、一番下の段に小さく延治と載つてゐました。

それから十數年間は延治、延次、延次郎、延治郎といろ／＼になつてをりますが、しまいには大抵延治郎で、給金は高々百卅兩から二百八十兩位の處。「お女中の悦ぶ柏餅」―上品できれいな天王寺ふくや」などの見立、位附は大體に上々でした。

文久二年の金剛傳によると

此お方は道頓堀河庄さんの御子息、幼名は實川延次といふて延若丈の門人、其頃は敵役で有しが四五年以前に江戸表へ下り、芝翫丈の門に入り中村延雀と改め御出勤の所、いやみのない狂言のお仕内にきざ氣がない故土地の風儀にはまり殊の外評判宜しく、一昨年故人梅姉丈養子となり御名前の御相續にて珍重く、然る處昨年六月養父菊五郎丈夫婦一日違ひにて死去致され誠に残念の次第なり。

昨年三月下旬に東海道岡部と鞠子の間宇都の谷峠にて

實父河庄氏と行違ひ升た、俸の噂がよいので逢に行れたのを見へき。

此れは三十歳頃の事で、一昨年とは安政六未年です。此れで大體その頃の評判がわかりませう。

芝翫といふのは、大阪の生れで江戸役者になつた人で今の歌右衛門の養父、あの踊の名人であつた成駒家のことです。それで延治郎から中村延雀になつた年代ですが商賣往來（萬延元年）には、去年より江戸へ下り福助丈（芝翫と改名する前）門に入、中村延雀と改めありとは安政五年に當ります。併し此れは何かの誤りで既に安政四年の判評記や同年見立番附にも「實川延次郎事 中村延雀」と載せられ、何れも正月の刊行ですから其前に起つたこととせねばならぬのです。

それで此翌五年には澤村訥升、片岡我當、市川九藏と同格、六年には市川團三郎と並び、「舞台お達者にて大いに受よく、すつぱりとした藝風は全く土地の人氣に合したと見へ升」との評も見えましたが又「延雀でゐられし時分は大そう評判もよかつたれど、菊五郎丈へ養子になられてからは人氣が落ちました」とあり、それでも「何をなされても夫々に仕わけらるゝは感心なお人、とか

く見物に悪くまれぬようお心がけかかんじんで御座ります  
是で芝翫丈の半分人氣があれば大立者く」とあるから  
大體は好評であつたに違ひはありますまい。

萬延元年の六月に養父の四世菊五郎が死にました。その  
時分恰度梅幸は上阪中でしたが、翌々年の秋まで江戸  
へ歸らず、あけて文久三年の春直ぐ上阪して元の井筒屋  
延三郎(後の二代目額十郎)の門へ歸り新參で、師の俳  
名延若を名乗ることになり、延三郎は延賞と稱しまし  
た。此間の養家離縁については大分込入つた事情もあり  
ましたらうが詳しくはわかりません。

さていよく延若となつてからはズツト大阪で活躍し  
たのですが、その頃よりポツ／＼頭角をあらはした三柳  
源之助、後の中村宗十郎と競争時代が始まりました。

宗十郎は始め中村歌女藏と云て四世歌右衛門の門人で  
名古屋で振附師をしてゐたとも云ひます。四世三柳大五  
郎の死後、その家の養子となり源之助と名乗り(萬延元  
)ましたが、その頃「氏なうて玉の輿」などの評があつ  
たのを思ふと何等門閥がなかつたことがわかります。  
慶應元年三十一歳の時獨立して中村宗十郎となりまし  
た。彼が果して古名優澤村宗十郎の風を慕ふためか

或はズツト昔の名跡を取立るつもりであつたか、その邊  
の處は確でありませんが、とにかく享保年間の女形に中  
村宗十郎といふのがあり、元文五年の評記に立役で初め  
四郎治とか云ふたのがありますから三代目にあたる事は  
當ります。

さて此兩優の競争ですが、前にも一寸云ふたあの見立  
番附を毎年見て行くとその形勢が一目瞭然ですけれど、  
一々書き立てるのもあまり煩雜ですからその大體をお話  
しましやう。

一言で云へば年も四ツ上であり土地の人といふことも  
多少は關係したでしやう、とにかく延若の方が一歩づ  
きで、給金附の如きも改名當時四一六百兩が、大抵五  
十か百兩程延若の方が多く、延若を大友と並べて「御兩  
人龍虎の勢、花形のきゝもの」とすれば、宗十郎の方  
は唯當時の花形の賣出しとばかりであります。

明治三年から十年頃までは前頭の筆頭、小結、關脇から  
ズツト大關にすはつた延若に對してやつと關脇位に止ま  
つてゐた宗十郎も、例の疝癪を起して引退した十年には  
二段ぬきの別格となり「一世一代千圓」横に「引改藤  
井十兵衛など、出てゐるのは、例の大火後阪榮座へ特別

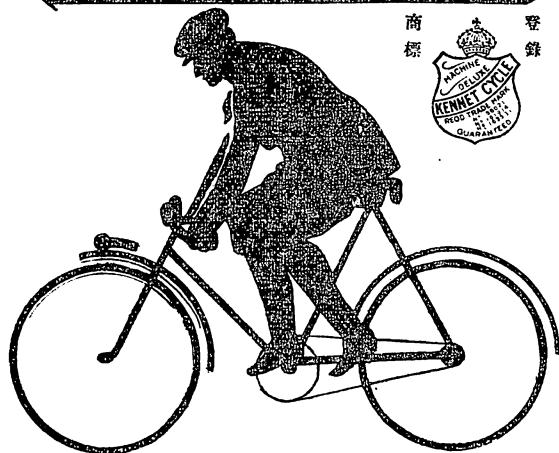
に出演した紙治（九年冬）のためでしやう。

それから再勤後の末廣屋は多く大關でありますが河内屋は大關乃至は勸進元、時には別格などで、つまりそれだけ人氣があつたと思はねばなりません。此れは明治九年の兒立に延若を越路太夫（後の攝津大掾）と組合せてあるのを見て一般が察せられます。

河内屋は臺辭一つ云ふにしても見物がワット乗つてくるやうに演るが、末廣屋の方はワットしかける見物をグツト押さえてしまふ風につとめてゐましたと、いつやら鴈治郎氏が話しました。此れは簡単な言葉ですがよく二人の藝風を云ひあらはしてゐると思ひます。恰度團十郎や菊五郎（五代目）の藝を見ますと、九代目の方は感心して頭が下りますが、五代目の方は嬉しうて直に大好きになるやうな氣がしました。宗、延兩傑の藝も恐らくこうした關係がありはしなかつたか、私は子供心にそうした感をもつてゐたのではあるまいかと今日から追想せられるやうです。

とにかく一方は純大阪の色立役。熱もあり潤ひもあり花やかで情の濃い生世話の名手、一方はたえず進取的であるが分別もあり、和らかい中に品位もあつて稍淋しい

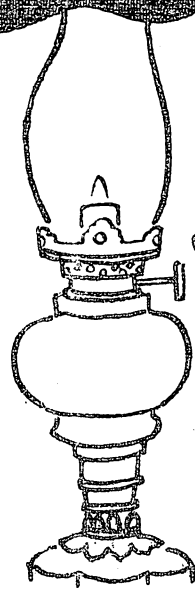
## ケノンツト号



が堅實な腹藝の達人、殊に兩人とも所謂名門の出でなくして、個々それを繼ぐべき状態にありながら其處を去つて獨立獨行、終には衰頹期の明星として燦然たる光輝を斯界に投げかけたといふ點について特に今日の若手俳優諸君の一考を煩はしいと思ふのであります。

abcdef

# 初世 実川 延若 若 と 綴 訳 劇



の  
し  
ん  
じ  
ん  
の  
し  
ん  
じ  
ん

大 橋 孝 一 郎

天保二年六月二十三日、大阪の高津新地に大工職の子として生れた彼が、三歳のとき、河内屋の養子となり、天保九年初世實川旭三郎の門に入つて延次と名乗り、舞臺を踏んだのを皮切りに、爾來五十年、明治十八年九月十八日齡五十五を以て黄泉の客となつた彼名優初世實川延若が、京阪の菊五郎と迄賞讃されたニツクネームで、嵐璃寛や中村宗十郎と鼎立して、關西明治劇壇の青史に赫灼たる光輝を投げかけてゐることは、既に周知のことである。また、丈の経歴や藝風に就いては、他に適當なる方が述べられることゝ思ふので、これは省いて、此處では丈が演じた唯一の翻譯劇に就いて少し書き止めてみよう。

我國に於ける翻譯劇は「勸善懲惡孝子譽」その他の所謂散切物で成功した黙阿彌が、明治十二年に、守田勘彌の爲に、リットン作の「金」から翻譯した「人間萬事金世中」を新富座に於て團、菊が上演したのを以つて嚆矢とすると明治脚本史では述べてゐるが、これでは當を得てゐない、何故なら、明治五年の十一月に既に初世實川延若が京都の南座に於て一つの翻譯劇を上演してゐるからである。この翻譯劇はスマイルスの自助論を中村敬宇氏が譯した「西國立志編」の一節から佐藤富三郎が脚色したもので「鞋補童教學」と題さ

れてゐる四幕物だ。筋は邦治と云ふ靴直しが仕事の傍ら、子弟教育に留意してよく努力することが國王に聞え、都に迎へられると云ふ下らない立志傳ものだが、當時の大衆には確かに好奇心を以つて向へられたものであることは疑ふ迄もない。扮装や舞臺装置の異國風な色彩が、未だ外國にうとい當時の觀衆には、その各々が珍であり、奇であつたであらうと考へられるのだ。

因みに、此の脚本が全て歌舞伎風に書かれたもので、全部チヨボで聯れてゐるのは尤もな話として一冊の書物として出版されてゐるのは面白いと思ふ。此の脚本の出版されたのは明けて明治六年、六十年前の話である。書物の表紙裏に當時の役割が掲載されてゐる處から見ても、相當な評判を呼んだものに相違ない。



實川延若（都伏者禮斯）、市川荒五郎（邦治）、坂東壽太郎（托馬士）、中村福助（韋斯里）、中村慶女（邦治娘李夫）

がその主なる役割だ。此等俳優の珍妙な扮装は、挿入した此の書物の口繪（筆者は白水廣信）に依つて察して頂くとし、次に、此の狂言の舞臺装置を抜萃して、どの程度まで外國の事物を舞臺に取入れてゐたか、どう云ふ具合にその事物をこなしてゐたかを察して頂いて、苦笑して頂かう。

▼第一幕——造り物平舞臺にして真中に九尺の家臺にして西洋壁、同じく異風なる屋根附、上下共袖山をなしかけ、いつもの處に異風なる門口、下の方に寒紅梅盛り有る。總じて皆雪持ちの書割。……兩名貧家の異人拵へにて、イスにかゝり、前に焚火を焚き（筆者註——ストーヴのことならん）書物を讀

てゐる體、雪嵐し淨るりにて暮みらく、

▼第二幕——造り物平にして舞臺一面漢竹の桶込み、真中に大きな石塔。上下ともに色々なる石塔あり。能程に草うね井筒の井戸あり、日覆より(?)松の釣り枝やはり雪もちの書割。すべて英國墓場の體。

▼第三幕——造りもの平舞臺にして西洋襖一面に立て切り、上よりランブ三ツ程釣り、真中に邦治イスにかゝり其の前にタアラル(?)を置き、鞋を補ひ乍ら皆々へ教學してゐる。…略…

▼第四幕——造り物向ふ一面に打拔浪の遠見にして上方より三間の二重を引出し右二重のけこみ浪の打よせ二重まんなかに大きな枯木あり。此の前に少し大きくして、ガラス燈立てあり、後に大木へ文字出て事あり(挿入口繪寫真参照)下の方一面に浪幕張り、下の大盡通りより蒸汽船出しかけある。空よりは松の釣枝、總て不利韻(註)英國海岸の體。と、以上の様な幼稚なる異國風景でも觀客の目には驚異に

映じたことは確かであらう。猶面だいは、此のト演と目を同じうして同じく京都の北座で、矢張り「西國立志編」より脚色した「其色彩陶器交易」を市川右團治、片岡我童、尾上多賀頭の面々が上演してゐたことである。乃ち明治初期に於ける此の翻譯劇の競演は演劇史上に充分特筆すべきことだと僕は考へるのである。

右は延若氏の決して成功した役柄でもなく取立てて云ふべきことでもないかも知れないが、丈の特種なる仕事として、又、明治演劇史の異色ある一頁を飾るものと考へて書き止めたまでである。(二月五日)

考參書——

- 伊原敏郎氏 「明治演劇史」
- 堂本寒星氏 「京都の歌舞伎」
- 亦橋聖一氏 「日本脚本史」
- 西國立志編 「鞋補重教學」



# 色と香と味の三拍子

花見に急ぐ春

本 山 萩 舟

萬年若衆の羽左衛門、前髪姿が悴の家橘よりも、若く美しく見えるのだから、何といつても驚異的存在にちがひない。

しかし近頃は間近に見ると、少々小皺が目立つやうになつた。花ならば靜心なく散初めやうとするところである。見るなら今の中である。

病氣後や、衰へたとはいつても、女形の有つ色氣と姿態と、しかもふるひつくやうな美貌といふのでも、輕難となつて纏ひたいほどの細腰といふのでもなく、それでゐて特の花街の女にでもなると、顔に、肩に、腰に、何ともいへぬ色氣の溢れるところ、正に至藝の徳といはねばならぬ。惜しいかなもう盛りを過ぎて、花ならば姥櫻、残んの色香を慕ふにも、

今の機會を逸したら、恐らく悔が残らぬとも限らぬ。

七十を過ぎた延壽太夫の美音、いろいろの批評はあつたにしても、すつかり圓熟の堂に入つたところで、これもやうやく峠を越し、最近多少の衰へは云々されるけれど、群を抜いた聲曲界の王者、雪中に高い寒梅の香に比へられよう。

トリオとしても久しいものだが、三人それ／＼の特長が、渾然と融合偕和して他の追従を許さぬ境地に、實は「權上」位では食ひ足らぬが、最も無事な點において、選ばれた狂言といふべきかも知れぬ。春もや、景色と／＼のふ頃、旅路の水もぬるむであらう。いづれも只管にすこやかなれとこそ。(昭八、一一、二二五)



# 延若の延二郎時代

辻田公紀

道場の芝居……京都の今の歌舞伎座の前身で、古くは宇治嘉太夫座である。當座はチンコ芝居の所謂道場で、青少年俳優の修業場であつた。最も道場とは兩座意味ではなく、其隣りに時宗の念佛道場の金蓮寺といふのがあつて、俗に四條道場と稱して……其處に在つた芝居だから道場の芝居……といつたので、別に青少年俳優の修業所を意味した道場ではないのだが、事實は此處がチンコ芝居の修業場になつてゐたのは可なり古い以前からの傳統であつて、因幡樂師の芝居が無くなつてからは専ら此

座が其舞臺になつてゐたのである。恣慮關係で鷹治郎の青年時代も此座に可なり氣勢を上げてゐたこともあつて、維新以前の俳優でも此所で修業して立派な立ものになつた人も尠なくないのである。

河内家の初代延若の遺孤延二郎……今の延若氏も亦少年時代當座に立て籠つて、都下の人氣を一身に集め好劇家の血を沸騰せしめた時代も在つたのである。

近代的に名優として今も人口に膾炙してゐる瑠寛、宗十郎、

雀右衛門等と覇を争そつて斬斷一頭地を抜いてゐた延若。眞辰  
々々の見かたにも依ることではあるが、此優の持つた柔らかな  
織、媚めかしい姿態、情味溢るゝ舞臺には何人の追従も許さな  
い獨特の天稟があつて、天下の絶品……と激賞せられ、幾多の  
名型を残して範を後世に垂れた。正に卓然として傑出した名優  
であると稱せられ、關西劇壇の花と讃えられて、京阪の人氣を  
集中してゐるのみならず、東京邊りの名家連を噂だけで恐殺せ  
しめ、ために團菊等の巨匠も關西下向を少なからず躊躇せしめ  
た形蹟さへある程であつたといふ。

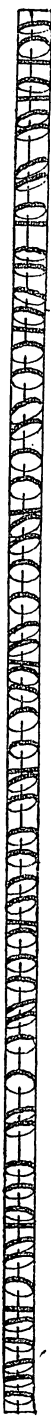
現今東西に炳然たる光彩を輝やかして梨園界を威壓してゐる  
成駒家の鴈治郎氏も名家の出ではあるとは云へ、實に此河内家  
の薫陶指導に依つて舞臺の道を拓いたものであつて、其鴈治郎  
の名も實は實川家の雁金に因んだ名であることは、既に周知の  
ことであつて、其治兵衛や忠兵衛の舞臺は、正に師匠の衣鉢を  
繼いで更に工風が凝らされた至藝であるのは云ふ迄もない。  
延二郎は實に此近世的名優の子である。併かも十歳に満たず  
既に別れた果報のつたない孤兒であつた。あたら關西梨園界の  
霸王として時めいてゐた巨匠の寵兒として、父の懐に抱擁さ

れて舞臺に立つたならば、適れ名門の御曹子として珍重され、  
好遇され、陣物に觸るやうに恭しくまつり上げられたのであ  
つたらう。今の長三郎や扇雀各氏乃至は芳子嬢のやうに……、  
然るに不幸にして父の舞臺の面影をさへ沁々知らぬ程に、此何  
よりの大綱に逝かれて終ふたことは當人に取つて何ぼう感慨の  
多いことたつたらう。

頼りのない程心細いものはない。幕内の認識さへ判つきりし  
ない中に板の間へ獨りホツ放り出されたボン／＼は、泣くにも  
泣けない幾多の苦しみに虐なまれたことであらうことは想像す  
るに餘りあることである。

併し親爺の目玉の輝やきに幻惑されてゐる、輕薄なお追従で  
くるみ上げられた苦勞知らずの懐中兒より、磨きのかゝつた自  
負心を激挫するのは怎麼境遇に墮落された方が人間の幸福で  
あつたかも知れない。

斯ういふと甚だ今の河内家氏に同情のない冷酷な言ひ草かも  
知れないが、事實今日此の舞臺に覇氣の横溢すること、悪くい  
ふと自惚れの強いこと、人を人とも思はぬ自負心の強い人格を  
築き上げたのは、全く親に早く離れて艱難辛苦の數々を凌いで



来た結晶であるといふて良いと思ふ。

爾こで其歌舞伎座：道場時代の昔を回顧して見る。最も私などは子供心に幽かに覚えてゐる位なことであるが、何でも彼氏の十五六、七八位の時分であつたらうと思はれる。延二郎一座の道場の芝居は蓋が明いたら樂の日まで押すな／＼の超満員で遣がに芝居好きの私の家の人なども場所取りに散々骨を折つて随分苦勞をした模様であつた。私の母を結びに來た髮結など來るから歸るまで河内家のボンチの話で持ち切りであつたことを覚えてゐる。

其頃今の吉右衛門の父の歌六が未だ時藏と名乗つて、後見役のやうに加盟してゐた、亡くなつた岡島家が雀三郎と稱し、大吉が關十郎と稱し、又廣三郎といふ可憐な女形もゐた。何れも活氣烈々とした若手揃ひで花々しい舞臺を續けてゐた。

其時分延三になつて亡くなつた正若が東向の芝居に定打ちしてゐたし、夷谷座には鰐十郎になつて死んだ龍次郎や瀧三郎榮次郎杯が籠つて對抗してゐたが、迎も此延二郎の一座とは太刀打ちの出來るやうな氣勢は上らなかつた。

何様大延若遊いて十年ソコ／＼しかならない時分であるから

其把握してゐた人氣の餘焰猶耀々としてゐた處へ、其遺孤といふので翁然として集つた同情は實に凄じいもので、到底比肩すべき何者もなかつた有様であつた。

幾程もなく延二郎君が入營して、三年の服務が母一人子一人の狀態に上官から同情されて、二年かそこらで除隊となり、軍服芝居杯を出したのをお名残りに大阪へ歸つて、青年歌舞伎の中心は延若に移り、福之助や若橋杯が加盟して阪井屋……即ち此道場の芝居へ移つて第二の氣勢を擲つてゐたが、端なくも重ね井筒の家紋のことから延二郎對正若の紛擾が起つて暫らく紛紜が続いた結果、漸く夷谷座で手打ちの顔合せ興行が行なはれ延二郎の松王、正若の源藏で寺子屋が出た。

其後チヨイ／＼南座通りへ來る位で、さしも京中を騒がせた人氣の焦點であつた延二郎氏も、京都とは段々馴染が薄くなつて行つた譯だが、兎に角三十年前の延二郎氏の京都に於ける人氣といふものは、壓倒的なもので、遣がの鴈治郎氏も京都には河内家のボンチがゐるから手に合はぬ……と鴻嘆せしめた程で、實に女子も杓子もヒン掴まつて洛中の人氣を全部彼氏が把握してゐたものであつて、其頃のことである。三代記の絹川閑



居が出て當然時藏の役であるべき藤三郎……後に佐々木高綱を雀三郎で演じ、時藏は義村、延三郎氏は時姫で仕丁數十人を引連れての花道の出など華やかなもので、河内家黨を無上に熱狂せしめたものであつた。

其後岡島家の吉三郎や葉村家の璃徳等と共に新派の鼻を明かすやうな新ものをも器用にコナシて眞眞を喜ばせたり、手にかけるもの其悉くを掌中のものとして甚だ巧妙に消化してゆく

手腕は、十二分に認めることが出来て、兎に角にも活氣横溢、霸氣満々、行く處として不足のない重寶な大名題だが、時々はその霸氣に禍される譯か、芝居を演過ぎて看客を煙に巻くやうなこともあるが、何れにしても關西に於ける將來の覇者たることには疑ひを挟む餘地はない。

幸に自車を停んで止まない處である。

洋酒界の革命兒國産洋酒の逸品

國産金鶴印

ウキスデキ  
ベラモン  
キユモラ  
ベール  
ジバミ  
養葡葡酒



元質發  
株式會社 横山商店  
大阪市東區豊後町三番地  
電話東(94) 一六六一  
二〇一三  
四六四九



錦繪に現れた初代實川延若



# 初代實川延若年譜

高谷伸編

延若の名は元來初代實川額十郎の俳號で、二代目もこれを繼承したが、これを藝名にしたのは先代延若にはじまる。故に通算すれば三代目になる延若を初代としたのは藝名尊重の現延若の所説による。

天保二年(卯)

出生。母ひさ。父は伯耆某藩の家中との説あれど定かならず。道頓堀の前茶屋河内屋庄兵衛の養子となり庄八と名のる。

天保十二年(丑)十一歳

實川延三郎(後二代目額十郎)の門に入る。九月初舞臺申の芝居、實川延次と稱す。

天保十四年(卯)、中の芝居出勤。

天保十五年(弘化元年辰)、實川延次郎と改名、京四條芝居出勤、嘉永頃——放浪時代。



錦繪に現れた初代實川延若

安政三年(辰) 廿六歳

江戸へ下り芝翫の門に入り中村延雀と改む。森田座出勤の十月「伊賀越」の和田志津馬、池

添孫八。

安政四年(巳)

森田座出勤。二月「天徳と俊寛」佐々木左門之介、丹波少将。八月「日蓮記」日朗「双蝶々」

與五郎「阿古屋」榛澤。十月「忠臣藏」若狭助「吃又」修理之助、

安政五年(午)、守田座出勤。七月「釣天井」大工與四郎、十一月「紙治」丁稚

安政六年(未)

正月。四代目尾上菊五郎に望まれ養子となる尾上梅幸と改名。中村座出勤。披露狂言「伊賀

越」和田志津馬。三月「妹背山」求女。五月「いろは實記」千崎。七月「千本櫻」義経と小

金吾。八月「英の皎」頼光其他。十月「お六櫛」鉸尾長兵衛。

万延元年(申)

正月「廓文章」おきさ。三月「瓢箪幕」小西行长「梅忠」治右衛門。四月「忠臣藏」若狭

助石堂千崎。六月、養父菊五郎。養母蝶死去。

文久元年(酉)

大阪へ歸る正中中。「柿の木金助」志村主水。三月筑後。「銘々傳」堀部安兵衛、早野勘平

「廓文章」おきさ。位置下の書出し。四月竹田「伊勢音頭」福岡貢(別格)七月筑後。小幡

小平次。

文久二年(戌)

筑後の芝居。三月「忠臣藏」若狭助勘平。位置書出しとなる。五月「廓錦繪」定助と權八。



錦繪に現れた初代實川延若

文久三年(亥)

三月。梅幸の名を返し實川延若となる。筑後の芝居「忠臣藏」若狭助。四月「千本櫻」忠信「大藏卿」茂兵衛と雁金文七。八月「天下茶屋」伊織久七。三勝の半七。七月「八犬傳」大助と信乃。

元治元年(子)

筑後芝居正月「北國梅」谷澤頼母若藤。五月「金毘羅」民谷源八「時雨傘」團七茂兵衛。八月岩倉宗玄と稻谷谷牛兵衛。十月「楊柳櫻」木津右門と淀屋辰五郎。南の顔見世辰五郎久吉時次郎。

慶應元年(丑)

筑後。正月「雪月花」矢田平「玄治店」與三郎。中の芝居二月「戀鬨札」伊達與作。同三月「達の大礎」しのぶ。五月「幸源氏」牛若。九月「龜山」石井兵助。

慶應二年(寅)

中の芝居。正月「華通矢」弟左市郎。三月「かしく」六三。五月額十郎の座頭に書出しとなり團七九郎兵衛。九月「小倉色紙」笹原単人。十月。宮本無三四「腰越狀」泉三郎。

慶應三年(卯)

正月筑後芝居。小栗判官。二月。師匠額十郎死去。三月。八百屋半兵衛と鏡山のお初。八月「かさね」與右衛門と里見伊助。九月佐倉宗五郎。

明治元年(辰)

筑後の芝居一月和藤内。尾花才三。三月鱸孫市。十次郎古手屋八郎兵衛。四月堀江雁金文七。五月「雁のたより」三三五郎七。七月めくら兵助。九月菊畑の虎藏。





錦繪に現れた初代實川延若

明治二年(己)

正月曾我五郎。三月大藏卿の鬼次郎。七月福岡貢。十月櫻丸と源藏。

明治三年(午)

正月八犬傳の毛野と現八。辨天小僧。三月。平右衛門と石堂。七月。雁金文七。八月。權太と忠信。十月勝頼と權藏。京顔見世刀屋新助。

明治四年(未)

二月「玉手箱」浦島太郎漁夫龜作。三月勘平天川屋。四月刀屋新助。七月相馬太郎。九月合法の高橋彌十郎と蘭平。現鴈治郎入門。

明治五年(申)

正月曾我十郎。三月松島の芝店新築。始めて座頭となり、十次郎と眞田幸村。八月人形屋幸右衛門と伊織。青山鐵山。九月木下藤吉。京の顔見世西國立素編の使者レイス。妻まん女を迎ふ。

明治六年(酉)

正月孔雀三郎と宿彌太郎高橋庄左衛門。五月油屋與兵衛。九月石川五右衛門と大黒屋宗六。

京顔見世阿經と勝頼權藏。乳貰ひの狩野四郎次郎。養子延次郎歿。

明治七年(戌)

二月兒雷也。五月植木屋左衛門帶屋長右衛門。九月大山道節。顔見世出村新兵衛。

明治八年(亥)

正月宮本無三四。三月(角)大一座。曾我十郎。九月めくら兵助。十月佐野鹿藏。五月休養中強盗に襲はる。

# ◆ 樂屋小話 ◆

## 燒 香

歌舞伎座三月興行に出演の中村鴈治郎丈、晝の部弘法大師劇に僧空海に扮して焼香の場で崇高な氣をたゞよはしてゐるが、この役を演ずるに先だつてさる高僧につき微細に焼香の型を修得したさある。

「まるで鴈治郎はんが弘法大師の様な氣がしました」

と感嘆した観客もあるとのこと、原作者直木三十五氏も自分に焼香でもされたやうに地下で悦に入つてゐるさだらう。

## 流行小唄

初代延若花やかなりし頃、例の有名人「延若ササササ、延若サ、」の雖小唄が流行したものだ。さころで何處かレコード會社へても頼んで現延若の應援小唄でも流行させようかと、きもいりをするヒキ筋もあるとか、幕間にも歌つたらごんなものだらう。

## 一 安心

今度初舞臺の延若丈の兩公達延二郎延之助の兩君、一つ違ひの仲よしてゐる。

「學校の逸強もむつかしいですが、藝

明治九年(子)

春道頓堀大火。九月筑後の芝居戎座と改稱(現浪花座) 新築落成。柳澤彌太郎。京顔見世佐野鹿藏と紙屋治兵衛。

明治十年(丑)

正月紙治。三月山内伊賀亮と三三五郎七。五月中田小八郎。九月船越重右衛門。十一月鳥井又助と狩野四郎次郎。十二月一子庄右衛門誕生(現延若)

明治十一年(寅)

三月西郷隆盛と谷村計介。九月大石内藏助と古八。

明治十二年(卯)

正月京で又助と油屋與兵衛。三月十郎と重忠。九月高知遠十郎と源五兵衛。十一月小割傳内

明治十三年(辰)

三月荒木又右衛門三浦之助。十月岡山騷動の清水四郎兵衛。顔見世長右衛門慈悲藏。

明治十四年(巳)

三月小山田庄右衛門。四月大經師茂兵衛。十月小笠原騷動の岡田良助と遠江守。顔見世に持越し興行中病氣休演、鴈治郎拔擢さる。

明治十五年(午)

三月小野實雅丸。五月原田甲斐茂庭主水と鴈金文七。九月佐野源左衛門と多胡の伊八。顔見世近藤忠之進。

明治十六年(未)

三月栗山大膳。金谷金五郎。五月俊寛と南與兵衛。顔見世中田小八郎。

もなか／＼むつかしいです」

と、あつて兩君とも懸命の舞臺、延二郎君は祖父(初代延若)へ似てゐるといふし、延之助君はお父さん(現延若)へ似てゐると云ふからごつちにしても名優になれる譯、先づ一安心の體

### つゞきとは

或る人が角座の樂屋で都築文男君に會つた。

「今度の新派は大變盛況ですなア、三月越しの續演とは素晴らしい成績だ！」  
すると都築君

「ハハ、ハ、ハ、そりや僕が居るからですヨ」

「どうしてマッス」

「僕のおかげで、ホレよく都築ませう」

「チール程れ」

### 武男と武夫

同じくこの新派劇の乃川武夫君の部屋へ、去る日悪友共がおしかけてゐた丁度田がせまつて、彼氏海軍士官の服装をしながら。

「どうもこの役は不如歸の武男になつて困るですよ、それに相役の瀧蓮子さんが高島田のうら若い女性と來てゐるのでよけいですよ」

すると側から

「それやアそうでせうとも、地が武夫ですからね」

明治十七年(甲申)

三月二葉松の宮津左京と貞任。十月天下茶屋の源助と幸右衛門。十一月。春色梅開曆の唐琴屋丹次郎。大阪最後の舞臺。この年養母歿す。

明治十八年(酉)

二月京の南の芝居。録腹の彌作と天川屋、小山田。九月戎座の三技譚に出場の豫定にて遂に起たす。九月十八日高橋病院で歿す。享年五十五歳。高津中寺町圓妙寺に葬る。戒名天遊院延若日暉信士。



## 名題昇進

みのる改

實川實三郎

實川實三郎は今度名題昇進、準幹部に推薦されました。

君の本名は高瀬春雄、大正二年三月十八日大阪今橋四丁目に生る。幼少の時より歌舞伎を好み子供心にも延若を慕ひ常に父母に連れられて丈の芝居は欠きず觀てゐた程であつた。六才の時その希望通り實川延若の門に入り師よりみのるの名を貰ふ。中座にて成駒屋の「權久の禿」に初舞臺。更に十七才の秋延若一座の「忠臣藏」の力彌を勤め初めて子役の域を脱し、十九才宗家藤間勘右衛門師に許され名取りとなり勘眞の名を許さる。今度名題昇進と共にみのる改實三郎となる。



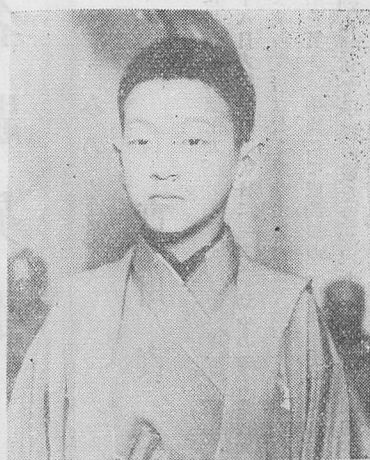
# 弘法大師

この一章を直木君

の靈に捧ぐ

大澤 休象

大阪の生んだ文豪、直木三十五君の原作、弘法大師を、大阪の生んだ、日本一の、鴈治郎丈が演ずる。といふ事、すでに劇的であり、その直木君が、大衆文藝に、一エボツクを劃する意氣込で、生命を捨て、描いたものだけに、且つ、従來歌舞伎の私事師として、古今獨歩の名優、鴈治郎丈が、始めて宗教劇に主役として登場する、三十年程前に演つたと聞くが、夫れは問題ではないといふ事は確に冒険であると思ふ。僕は、この劇に對して、五分の期待と、五分の疑懼を抱いて



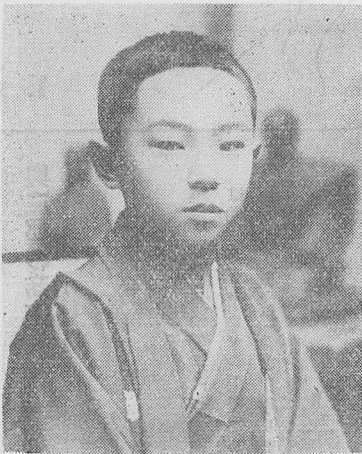
初 舞 川 實  
郎 二 延 川 實

初代實川延若五十年追善興行の三月の歌舞伎座に初舞臺の實川延二郎は大正十年一月三日生れ、本名は天星正三。初代延若を祖父に持ち、現延若を父として生れ、晴れの初舞臺に畫の部「尾形光琳」の子方右京、「安宅關」の里の子、夜の部では「壽生立會我」の曾我十郎祐成、「小三金五郎」の弟子お千代等で、何れも立派な成果を擧げてゐます。容姿端麗、初代延若の面影を偲ぶが如き風姿は、將來祖父の如き世話立役として、或は女形としても成巧を治めるかとも思はれます。幸初代、二代共におとらざる名優たらんとして精進されんことを。

る。初日早々観に行きたいと思つてゐたが、良い場席を取りそこなつたのも、何だか恐ろしい氣がして、いまだ、遠くから、恠々してゐるのみだから、演技の功拙に就て、云爲出来ないが、特に考へさせられる一事は、今の大阪人の、文藝及び文士に對する態度の冷靜な點である。

その往昔、西鶴を生み、大近松を育てた大阪、東洋一の、經濟中心地たる現代の大大阪が、文藝に、いかなる關心を有つてゐるか、聽く所に依れば、松竹では、鷹治郎一家の生活費全部を賄つて、この一代の名優をして、後顧の憂無からしめてゐるといふ。洵に結構な事だ、後世までも傳へるべき大阪の誇りと信ずる。が、翻つて、直木君を憶ふ時、僕は、私に暗然たらざるを得ない。何となれば、直木君が、弘法大師執筆中、病ひ篤くして入院した時の所持金僅か三百圓たらすといふではないか、役者も文士と、ともに、はでな職業ではあるが、一方は生活の保証をされ、一方は貧と過勞に窮死する。僕の云はむとする所は既に明らかであらう。大大阪人よ目醒めて呉れ。

(三月四日識)



初 舞 臺

實 川 延 之 助

延二郎と共に今度歌舞伎座に晴れの初舞臺を踏んだ實川延之助は、本名天星隆司。大正十一年八月二十七日生れ當年十三才の少年です。父二代延若の風貌を最もよく受繼いだ感があり、既に豪放勇邁の氣がうかゞはれます。畫の部「尾形光琳」に子方左京、「安宅關」に里の子、夜の部「壽生立會我」に會我箱王を勤め凜とした氣魄を見せてゐます。將來父延若の藝風を最もよく繼承するものかとも思はれて既に十分な期待と囑望を掛けられてゐる所以であります。

切られ與三

富田英三

「ネ、あのキズ、チヨツとスゴイけど魅  
力的だワ」  
切られ與三、大きな耳を立て、  
「エヘ、何なら着物を脱いで御覽に入れ  
やしょか？」



切られ與三



してやられた蝙蝠安

富田英三

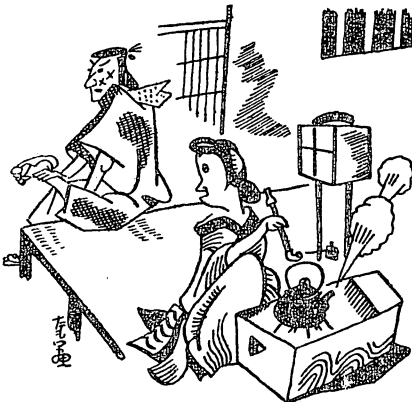
「エヘ、エヘ、お富さん、今日はいゝお天  
氣で……」  
「また、無心かえッ、ン、生憎、今日はバ  
ツトが品切れてね……」

E. 84

與三郎の商賣

大槻たもつ

「誰だいゝだまつて還入つて来てサ、押賣リ  
は勘辨だヨ。オヤツ引振傷の符薬屋さん？  
お生憎さま、ごつさりありますヨ。」



酒場「源氏店」

秋田 收 一

マダムお富

「乙に色男ぶつてやがる今時そんな臺詞は流行らないよ憚り乍ら今じやバットの安さんといふ惚れた亭主のある身體さ……お生憎さま」

バットの安「兄貴すまれえナ……」  
與三「……」



マンガのページ

安宅關

秋田 收 一

辨慶始め主従十二人さくら音頭で踊り乍ら

辨慶「吾々は皇子御降誕慶祝の爲めの假裝行列です」

富經「それは〜お芽出度いまア何もありませんが御祝酒なりと」



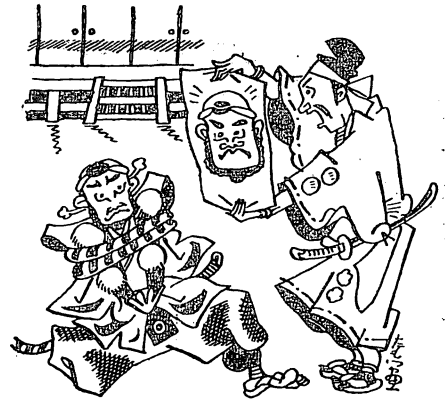
吉野山後日譚

酒井 七 馬

義經にチャイしられた静と初音の鼓を慕ふ  
忠信は遂に萬歳に轉向——！



歌舞伎座上演



(上) 辨慶の似顔繪

大槻たもつ

「畜生ッ、誰だか知らネーがうまく描きやがつたゾ。一枚二十銭にやー惜しい作品だ。」

(下) 弘法大師

山崎喜一朗

大師逝いて千百年、忽然と現れて今靜かに物故俳優諸君のメイフクを祈りつゝある處――

(上) 安宅關

山崎喜一朗

その昔京の五條の橋の上で散々イヂメられた辨慶が今その復讐をやつてゐる等と思つてはいけませんよ。

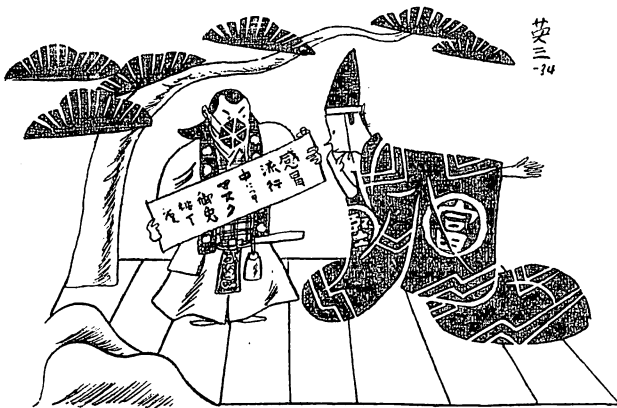
(下) エロ問者

大槻たもつ

「アーム近頃見慣れぬ女中、こりや滅多に油断はならぬ……」。「アレツ大石さん、妾に色眼つかつてるヨ。油断のならぬこと。」







バラリと展げた観進帳に  
 ……感冒流行中に付きマスク御免被下度…

三 英 田 富

慶辨たいひを邪風

馬 七 井 酒

兵 麿 質



お 富

「おや、興三さんッ」

バツトの安

「しまった！飛んだ内職を見破れた——」

# 初代近者 の漫筆日記

伯耆の國の城代家老の  
三田坊で大阪の芝居茶屋

の  
を

の  
屋  
内  
の  
八  
の  
子  
に  
た  
つ  
て  
毎  
日  
お  
へ  
ん  
や  
ら  
し  
ま  
す  
屋  
々  
ら  
を  
運  
ん  
ど  
お  
る  
う  
ち  
の  
役  
者  
に  
な  
る  
た  
る

明治十年  
十二月の狂言で今月の狂言が生まる

安政五年 近者と名乗って江戸へはし  
り 四代目菊五郎の養子になつて  
梅幸となる



燕も様  
もない  
時に江  
超スピード

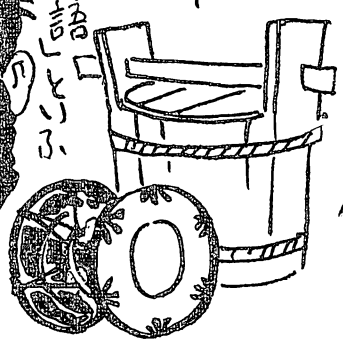
八代目片岡  
仁左衛門が自  
分の役の伊賀越  
の「政右衛門」を  
ワガと病気に  
どいつ休ん  
で代役を  
やら



物  
と教へる  
おれこれ  
面で見  
かひつ  
て正  
その  
安貞  
頭  
ゆ  
す

すしやの権太と  
吉野山の忠信。大あたり

明治  
十一年  
西南  
遊学  
物



「言語」といふ

カンギリもの

高教 (西郷隆盛)

にたふ

上演大評判

大段桃

名の別荘で  
芝居がハリ  
で徳と見  
得

すわりこま

刑をやりこめさせる



「サ、返答は  
ナナナ  
と...」



文久三年梅寺の夕を返上して  
近若となる



明治  
十年  
正月

宗十郎と紙治の  
競演をやる

黒羽三重に  
白の年杖



花道  
へまこ  
ハタと



# 弘法大師

(全三場)

— 歌舞伎座上演 —

上田啓一郎

時は平安の朝のはじめ、弘仁元年の秋、藤原仲成薬子の叛亂をえがいて居る。烏帽子、直衣の頃の美の舞台だ——

## 第一場 東寺境内

上手寄りにある東寺の門の内側——門の外の都大路を、四民があはたゞしく往きかふ——戦亂のうはさがばつと立つて、女子供を眞先に、家財道具をひつかついで、逃げ場もない程迂路々々する——

しかし、築土のこなたの鐵燈籠に射す小春日和の陽光は、世の騒がしさも知らぬ氣にのどかだ——

上手の石に腰をおろした優婆塞と二三人の漂泊者は、下手にかたまりあつた商人の一團の高らかな話に聞き入つて居る——

「お寺の衆から内々で聞いたのぢやが、空海阿闍梨様が、昨日俄かに高雄から東寺へ御下山なされたもお上の急のお召しがあつたからぢやと。今日も朝早くから御参内とよ。大和から急の御注進がしきりとある。田村鷹さまを大納言へ昇されて御節刀を賜はるとやらさうな。まるで此頃は蝦夷征伐の時とそつくりぢや。さうかと思ふと奈良から戻られた錦鷹さまはお疑ひ蒙つて押籠められたともうはさがある——奈良方では、是が非でもこの山城の都を潰して昔通りの奈良の都を再興するのぢや云ふて藤原の薬子と兄の仲成朝臣が、四方八方から味方を集めて、明日にも戦を押しかける構へが出来たさうな——」  
うはさに閉てる扉は無いと云ふ——陣中の秘策迄

既に四民の口から口へと恐怖をまきながらはやぶさの様に傳つた——

「都に住む俺達は勿論、日本國中下々の者が血の汗流して此都をこしらへ上げたのは何の爲ちや、新しい御代の有難い御政道のお蔭で安樂に暮したい爲ではないか。」

「奈良の都の頃には、隊いでも隊いでも食ふや食はずだつた。老人も若い者も、四民みな天朝に歸依した今日、薬子の謀叛は戦はずして天理にそむいて居るらしかつた。それにもかゝはらず勝敗の不安は四民の心におどろのかげをわかませるのだ——

近衛將監紀清成出陣の祈願を了へて空海の高弟實惠と共に出て来る。其處へ東寺の門から、疑ひはれて出陣を拜命した錦麿が、從者に供物捧げさせていそぐと出て来る、

「今度こそ錦麿命の捨て處——」

「如何にも錦麿殿お互ひに思ふ存分働きませうぞ。」

兩將は昂奮した聲で高々と笑ひあつた。其處へ上毛野の大外記と右近衛將曹住吉豊繼とが合せる。

上毛野の仲成の軍が愈々奈良を出動した報をもらしてかけつけたのだが、伏見で馬をのりつぶして其處から此處迄走つたのだと、聲もさだかならぬ程に息をはづませ、御注進を急ぐと早々に去る。

戦争がいよいよ初るのだと知つた先刻からの四民が戦き騒ぎだつた時、輿にのつた空海が、人々の呼びかけるどよめきの中を弟子達に添はれて歸つて来る。輿をおり門内に入ると、さはめきたつた人々は何れも合掌し迎へて、眼に見へぬ佛の力がひしくと迫る——

錦麿は聲をかけた。

「空海和上。火急のお召しの御下向の次第は？和上の御奉答は？御體あれ、あの夥しい群集は皆和上によつて安心を待つて居りますのぢや。」

「空海は出家沙門にあるまじい事を御奉答申し上げました。」

空海の聲は斷定的におごそかだつた。もはや誰も立ち騒ぐけはひの無い中で、彼は實惠達に命令するのだつた。

「怨敵降伏の祈禱を修する。早ひ用意致されい。」

第二場 淀の河畔

芦荻がそよぎ、その穂末には男山が眺められる。

一方に矢よけの柵があつて、數條の矢が立つて居るばかりでない——ひようくと、流れ矢が、一とすぢ二條、そして人馬の死骸がいくつものころがつて居る——劇しい戦闘の直後の風景だ——いゝや鬨は尙續いて居る。風におくられる遠近のときの聲が迫らうとする夕闇をゆるがして来る——

行成の手の兵士が五六人傷つきよろめいて退却して来る。と、柵かげで劇しい鞭の音、續いて

「おのれ卑怯者め。」

とのゝしる薬子の聲がして、巨勢の田上を鞭うちながら出て来る——

「えゝ止めやるな左馬頭、此様な卑怯故、勝つ可き戦にも負けるのぢや。いゝや、聞かぬ、聞かぬ。其處等の腰拔共もようく聞きや、傷つておめくゝ引き返す間に何故敵と差し違へぬ。行きや、行きや同じ死ぬなら兄者の帽となつて死にや。」

とヒステリックにあばれ廻る。

遂に田上は憤然として、

「もう是迄ぢや。奈良に居合せたから従ふたものゝ、もう不義の戦ひはしたうござらぬ。」

と傷兵共と上手へ去るのを薬子は蒼く怒つて追つて行く。侍女共も去つた時、柵から獵師の妹五百枝がそつと出る。と兄の赤彦も出て、お互ひに身の不運を嘆きあひ脱走をくはたてる處へ、傷ついたり成がやつて来て赤彦は厭應なしに引つとらへられる。獵師である處から弓矢をあてがひ、矢には毒をぬらせ、敵陣に追ひ込み田村鷹を射とめて來い。とおどしつけて追ひやる。其處へ、右近衛の豊繼の軍勢が新手を以て左翼に現れたので味方は益々の苦戦だと軍兵が注進する。行成は、折柄戻つて來た薬子に、既に早覺悟せよと云ひおいて、敵を迎へ討ちに一方に行く。薬子は念誦佛をだして最後の祈念をしに柵の中に入る。

月が出る。矢が劇しい。

傷ついたり兵がぞくぞく退いて来る。其間に、赤彦も既に傷いて出るが、豊繼に追はれ大童で逃げて來る行成をみとめると急いで昔間に姿をかかくす。必死の行成は、數打の後、豊繼等を切り立て、下手へ追

ふて行くと、毒矢をつがつた赤彦は行成をねらひ乍らそつと尾ける。

覺悟した薬子は、再びのがれようとすする五百枝に無理矢理に矢の根にぬる毒をのませ其死ぬのを眺めて、自分も笑ふて死ぬと云ふ其毒をあふいで死ぬ。此時、行成を美事射とめた赤彦がもどつて来て、あ

たら絶命した五百枝にすがりつく――

月が消え、矢の様な時雨――

暗黒の中に、雨、風、稲妻――

### 第三場 東寺の内陣

どろどろ闇の中に、一心不乱に秘法を修する空海の姿――

狂亂の薬子と仲成の形相が闇の中に現れて、のろひの言葉と俱に幾度か空海にとびかゝらうとするが空海の念力にうち破れて、遂に枯芦のそよぐように白氣立ちのぼる只中に消えてしまふ。

修法日をはつたのだ。

空海は本尊に三拜して満願を大謝する。と其時、勝戦の歸路、坂上田村麿を初め、錦麿、住吉豊繼、

紀清成等が數人の武者を伴れて勝報と謝意をつたへに來る。

空海は合掌した――

「これ空海の法力ならず、恐多くも御上の御秘威による所、平安の都は永久に榮えませうぞ。」

外は白々と夜があげかけた――

すぢを追つての話では、芝居のありがたさは判るものでない。紙數もすくないまゝで要領を得させようと云ふのだからそもそ無理な話だが、第一場はともかく、第二場は昔萩に月がかゝる頃、二人の女が、夢のように笑ひ死ぬと云ふ毒をあふつて、二人二様の死に方をする凄慘さは、ヨカナンの首を抱くサロメの凄美に比べたいと思ふ。

第三場幕あきの修法の空海、其おどろの闇の中に邪魂浮び上る薬子と仲成とのらせつの相のすさまじさは、只、舊芝居と云ふ達成されたシンボリズムの方法だけによつて表現されるものだ。

弘法大師記念の年――

さらにある傳記物的芝居でない――御損にはならぬ一と幕三場のお芝居でござります。

# 春の外國映畫街を行く

## 太 宰 行 道

この春の外國映畫界は、かけ聲こそ華々しくないが、粒揃ひの映畫が次から次へ押寄せせてくる。勿論、この春も、アメリカ映畫を主體とした陣容であるが、歐洲映畫の肉薄もなかなか侮れないものがあつてこゝもと楽しい壯観である。

昨年「マルガ」に匹敵し得べき素質を持つものに透明人間がある。これは、映畫には不可能なしの言葉を立てし得べきものと云はれる。こうした獵奇怪奇的作品では老館の觀あるユニバーサル映畫會社の、この年に於ける自慢の一。主演は、シアター・ギルド出身のクロード・レインズ氏、それにゲロリア・スチンアート嬢——監督は、ゼーイス・ホエール氏、この人は前に「フランケンシュタ

イン」を作つて、驚くべき老練さを見せた。

正しく完全な人間であり乍ら姿なき怪人、透明人間と云ふ最も近代的な興味におどる主人公——歩く、戀する、食事する、煙草を吸ふ、凡て人間の行爲と意慾とを持つてゐる。

只姿が見えないだけ、この透明人間に怨まれたらいつ殺されるか分らない。秘密も何もあつたものではない。ひとりでにポイントが動いて、急行列車は谷底に轉落する。この透明人間に戀された女性の感情を考へて見るも面白いではないか。

紐育では物凄いロングランをやつたと言はれる。「キング・コング」とは又違つたスタイルとスケールと興味を持つてゐる。

永のやうな戦慄があり、火のやうな興味ある。怖し見たしの戦慄映畫である。

「トバース」これは、マルセル・パニョールの有名な芝居の映畫化、鬼オベン・ヘクトの脚色才子ハリイ・ダバテイ。ダラストの監督で主演するはジョン・バリモア。

「キング・コング」や「世界大洪水」のRKOラジオ社がつくつた珍らしくも最も良心的な作品、この一本に出つても、この會社は誇りを抱いてもいい。

すつきりした内容とスタイル、そして都會人的な皮肉とユーモアと洒落——誠實だけではこの世を渡れないことを知つた男が、いつしか、その逆手を使つて、惡の社會を足下に見る——微笑ましい好感の持てる昔畫である。

「不思議の國のアリス」——おかしの「ビーター・パン」ほどの童心的な匂ではないけれども、一つの童話スタイルを持つ喜びの映畫である。三千人の舊女の中から

撰ばれた主演者、ことし十七歳になる彼女——原作者ルウイス・キヤロル氏から折紙付けられた幸運のスター——シャロット・アンリイ主人公である。鏡を覗き見て、その後にあるものは何であらうか？好奇心を抱いた主人公が、その鏡の中を通つてうしろに入ると、凡てが反對である。

子供心につのり行く好奇心、それが色々と經驗する興味深い物語が、終りまで微笑ましいものを見せる。

いろ／＼の動物、カルタのキングにクインなどが現はれる。これらは、バラマウントスターが總動員して興を添えてゐる。

ゲリーイ・クーバ、リチャード・アレン、ケリーイ・グラント、ペイ・ル・ロイ君、ジャック・オーキー、チャールズ・ラツグルス——それ／＼個性こまやかに味を見せ笑ひをつゐる。

「南風」——メトロ映畫、監督は良心度角度につれに立つて、好もしい作品を



おくるキング・ヴィダー。「街の風景」「南海の劫火」「ハレルヤ」「チャンプ」。こゝでは、一番情趣深いリリックな世界が描かれてゐる。

故郷に歸り來る都會の女、それをめぐる因循で傲嚴で排他的な田舎の人々、土に親しむ愛すべきパースナリティの若い青年學者。都會の女はやがて家をついて故郷にとゞまり、青年學者は都會の大學教授に招かれてこの土地を去る。このラストの切りあげ方は、實に何とも云へないセンスを反映してゐる。

故郷の夢をおくる南風——フロンチョット・トーンのみことな演伎ミリアム・ホプキンスの巧さ、ライオネル・バリモアの味。時畫愛する人に一ばん喜ばれる映畫である。

「エスキモ」——  
有名なA.S.ザアバイク作品

トレイダ・ホーン以上の成績を豫想されるメトロ映畫である。雪と氷と寒の中に一生をおくるエスキモ人の生活——自然の戦慄、人間の努力、凡そ文明社會の夢想だになし後ない數々の話題をつくる。

「妾は天使ぢやない」、——

メイ・ヴェストロメイ、ウエストロメイ・ウエストロこの文字を乗せてサインが都會の夜を横行する。疾風のやうに、スタアダムにかけ上つた妖星メイ・ウエスト、アメリカ映畫界をひつかき廻したこの妖星は何ものであらう。

フレデリック・マーチが出ても氣にならぬ。マルクス四人兄弟も不用だ。ロイドも問題ぢやない。シルヴィア・シドニーなんかどうでもいゝ。パラマウントが只この一人にかちりついてゐる所以は、メイ・ウエスト主演が現はれるが最後、どここのごんな映畫も太刀打ちがでさない。

性慾の化身、原作もする、芝居もする、歌も歌ふ、手八丁、口八丁、行くところ可ならざるはなつと言ふ。メイ・ウエスト。

今日のアメリカのデカダンスをそのまま具現したやうな彼女の前には、老ひ若きもない、凡てが、さるけるやうな、爛れるやうに魅持の中に押込められる。

パラマウントの株を幾割かせり上げた物凄い存在である。

これらはアメリカ映畫の、この春を飾るほんの少しのビツク・アップにすぎない。

そして、これらに對抗して、歐州映畫では、シャリアピン主演の「ドン・キホーテ」ルチール原作映畫の「にんじん」——「ヒットラー青年」——が登場する。

共産黨とヒットラーとを對照し乍ら、新興正義の旗の下に成長して行くナチスの姿を描いて而もそれが火の情感を漲らせて、ぐひぐ

ひと引きつける點、恐らく、ヒットラー青年はこの春最高の感激ではあるまいか？

## 春の踊り歌詞

### 櫻咲く國

一 櫻咲く國 さくら櫻

花は西から 東から

こゝも散りしく アスファルト

櫻吹雪の 狂ふあしどり

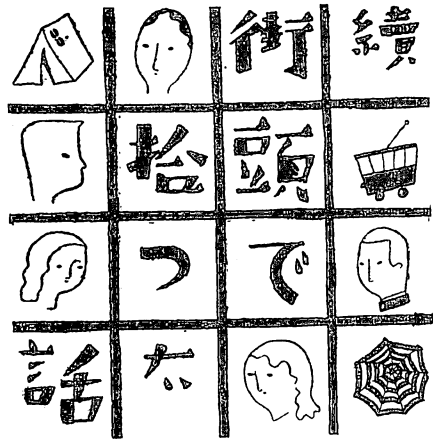
二 櫻咲く國 櫻さくら

春がこぼれて 君想ふ

愛にほころぶ シャンデリア

櫻吹雪の 晴のまひぎぬ

(松竹座上演)



曾我廼家十吾

奉祝の夜

皇太子殿下御降誕の奉祝祭が最終の晩です。十二時近くになつてゐますのに、祝へや踊れと乳舞する各種の假装行列の團體で、街は身動きも出来ない程の大騒ぎでした。私は「押すなく」と見物する群集の中まじつて居ました處が、S廓の美形連が「手古舞姿で萬歳音頭を踊つ

て来るその中に、酒癖の悪い某が酔ひつぶれて踊つてゐるのを發見しました。

「アハ、こらいかん……」

その男に捕まると五月蠅いので私はその後から逃げかけますと、

「よう兄貴……」

と、天外が私の前に立つてゐるので「一寸逃がして、酒癖の悪い某が向ふから来る……」

「そうか、ではワイと一緒に行こう……」

「行こうて何處へ？……」

「カフェエやがな……」

と有無を云はさず天外は、私の手首を啜く握つてカフェエ〇〇へ引張り込みました。

ホールの中には行列崩れの人や洋服氏で満員 此處も街以上の喧噪を極めてゐます。

「まあ……天外さんやわ……」

と番の女給や番外までが天外を取り巻い

て舞臺以上の大もてです。空席の椅子につきますと、ステージでは休憩してゐた管絃樂團が演奏開始の用意をしてゐます。指揮者がコンタクトを持つて前に進みますと、一同は待つてゐましたとステージの方を向いて一齊に拍手を送りました。すると東側のテールに居た行列崩の五六人の一人がフラックと立つて、

「オイ萬歳音頭やつてんか……」

「そや〜萬歳音頭〜」

と連の者もはやし立てます、西側に居た洋服氏が両手を上げて

「オイ……さくら音頭やつて呉れ」と云ふ聲に續いて傍に居た洋服氏連も

「さくら音頭〜……」

と連發します。

「馬鹿ツ、此方が先ぢや……」

東側はむくつとして聲を揃へ西側に反撥します。西側も負けてゐません東側に挑

戦して、

「やかましい、さくら音頭やれッ……」

「そんなもん明日やれ…萬歳音頭〜」

「うるさいッ……」

「阿呆ッ……」

「何ッ……」

「やれ〜……」

「コラッ……」

と東側と西側の連中は止める女給を突き飛ばし、ビール瓶や椅子を持つて殺氣立ち、今にも血の雨が降らんとしたその間髪、ステージーからいとも静かに、

「君か代は……」

と国歌が奏され始めたのです。私と天外は

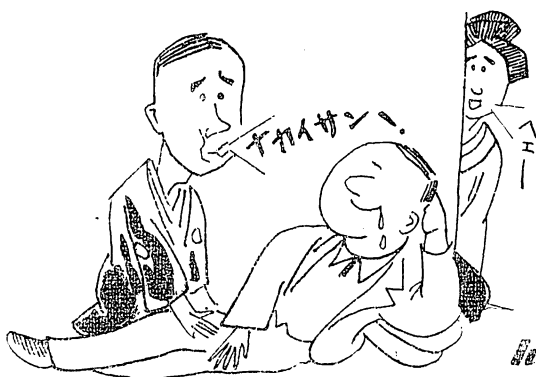
「早く直立不動の姿勢で、」

「千代に八千代に……」

と音楽に合わせて合唱しましたので、殺氣立った双方も急に襟を正し行儀よく、私等につれて君が代の歌を合唱しました。

### 一度ある事は二度ある

モノの云ひようは其の時と處でよく誤解を生むものです。或る晩私は知人が酒を呑と云ふので、歌舞伎座裏の割烹店某へ案内しました。知人は家の割に料理も



酒も良いと褒てかなり呑みました酒が廻ると、舌が廻らなくなつて居睡を始めましたので

「もし中井さん……。中井さん……」

私は居睡をする知人を起しかけますと襖を開けて仲居さんが座敷へ顔を出して

「ハイ——お呼びで御座いますか」

「イヤ……呼ばしまへんで……」

「左様ですか、それは失禮を……」

と無愛想な顔をして去りかけました時

又私は、

「中井さん……」

と知人を起しかけると廊下で

「ハイ……と又仲居さんが座敷へ來ます。

「濟まん〜此の人が中井と云ふ名前ですから中井さんを起してゐるのです……」

「まあ左様ですか……失禮致しました」

と仲居さんも笑ひ乍ら座敷を去りました

此れと同じ様な間違ひが又その家で續いておこりました。私が廻へ行くので廊下

へ出ますと、そこに酔つてゐる洋服の客

が突立つてゐるのです。その客が避ける

私の方へヒョロ〜とよるめいて突當り

ましたが

「どうも濟ませせん……」

私は相手が酔つてゐるので此方から謝つて行過ぎようと思つたとその客が、

「オイ……」

と言葉荒く聲をかけるのです。

「ハツ……」として私は振り返りますと洋服の客は別に私を呼び止めたと言ふ様子でもなく、行かけますとき又言葉荒く

「オイ……」

とその客が呼ぶのです。私はむくつとして振り返りました、するとその客は又怒る様に、

「コラ大井ツ、早様出て来い……」

と云ふ其の返事が圓の事で、

「フン……」

としてゐました。

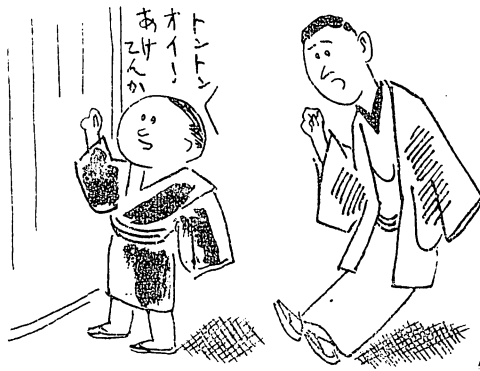
### 近所の子供

私が劇場から歸り夜食を濟まして寢る頃になりますと、定つた様に毎晩近所で

表の戸を「トンく」と叩き、

「オイ開けてんか……信吉とん……」

と店の人を起すお酒のある聲がするのです。私の家の者の話では二三軒先のり



店と云ふ店の若旦那が遊び好きで、美しい奥様をお貰ひになつても獨身の時と同じ様にお茶屋遊びはその日の日課になつてゐますので、然し感心な事には一時に

なるとどんな事があつても店へ歸つてみ

へるとの事です。ですから私の方では「トンく」と戸を叩く音と「信吉とん……」と云ふ聲を聞きますと、

「あはもう一時や寢ようか……」

と床に就く習慣になりました。處が四五日前から「トンく」の音も「信吉とん……」の聲も聞へなくなりましたので不思議に思つて居ましたその翌朝表へ出ますと、店の東側に住んで居られます家の可愛らしい五ツ六ツの男の子が、近所の遊び友達と自分の家の表戸を「トンく」と叩きながら聲を張りあげて、

「オイ、開けてんか……信吉とん……」

と若旦那の眞似をして遊んでゐるので此の無邪氣な子供の似眞が奥様の御意見よりよく利いたのか、「オイ開けてんか」の聲がその後ばつたりやみま

した。そして旦那の遊びもやみましたと奥様が云つて居られたさうです。(完)

◇ 與、話情浮名横櫛

與三郎 モシおかみさん。お富さん、イヤお富、久し振りで逢つたな

富 私をお富さ知つてのお前は、與 見わすれたか、與三郎だ 富 ヤお前は與三郎さん、ようまア無事で

與 しがれえ戀が情の仇、命のつなも切れたのを、どう取り止めてか木更津より、めぐる月日も三年越し江戸の親にや勘當を請け、ヨンドコロなく鎌倉の、ハツ七合を喰ひつめて、つらに受けたる看板の、疵がもつげのてふはうに、切れの與三と異名を取り、押がりゆすりも習ふよりのなれた時代の源氏店、其しらはけが黒癖に、格子造りのかこひものは、死だと思つたお富とは、お釋迦様でも氣がつくめへ。よくもおぬしやア達者て居たな。コウ安、是じやア、一歩ぢやア歸られぬえ。

◇ 南部 坂

大石 御覽の通りの雪道、何事も手前が不調法、何卒御用捨下されい

一角 イヤならぬ 大石 エツ 一角 町人ならばゆるしもしやうが、大小たばきむ上からは、武士に相違あるまい、用捨は致さぬ、サア此場にて勝負さつしやい

大石 ソレは又あまりに迷惑 一角 ナニ迷惑とは何が迷惑、サアとく勝負さつしやい。無理難體に夜目遠目、傘かたむけて打ながめ ヤツお身は何處かて見たやうなフム、いつぞや京の祇園町、たしか一力とか申した茶屋で見受けた御仁うきと浮名をよばれし浪人、赤穂の大石内藏之介だ 大石 お目立ちますれば是非もムらぬ、如何にも大石内藏之介でムる。 一角 フム、この窓下は淺野土佐守の邸、扱はかれの噂の如く、いろ／＼本望の日が參つたか、これは失禮いたした、まことの武士に對し先刻よりの無禮平におわび申す

◇ 其小唄夢廓

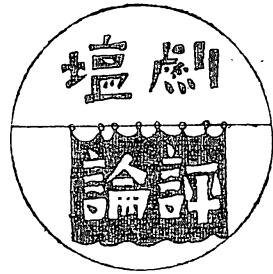
權八 有難きそのお詞今に至りてかへらねどかく大勢の御見物へ今權八身の懺悔御聞下され。そも白井權八の生れ故郷は因幡の國跡先思はぬ若氣の短慮義によつて人を害し、遙に下りし此の東ま路フト色里へ通ひ初めしげ

／＼行けば浪人の善へ盡きて我さ苦しむ身の罪科、若イ御方は取り分けて見る程の事羨しく終にはかへらぬ不了箇色と感とに身を果す此の身の見せしめ業曝らし業のはかりや淨婆利の鏡に寫る罪科と悔めどかへらぬ身の大罪衷れと思ひ一遍の御回向願ひ奉る 我と悔みの教訓も心の駒のいそがれて 竹中 先否を悔いしその詞頓て罪障消除なきん 石割 エ、人を殺したその上で悟つた處が後の祭り何んの役に立つものか 二、ぞ名におふ鈴ヶ森、最後場さして来る折しも臍をぬけて小紫裾もほら／＼駈來りト、向ふより小紫出る 小紫 ヲ、權八さん

◇ 安宅 關

富樫 ヤアしれたる山伏かな、この一巻はあの法師が勸進帳と名づけて天も響けと讀み上げしも、奪ひ取つて披見すれば、是見よ、勸進の趣意は、一字一點もなき往來の卷物、それつらくおもん見れば、なごさ誠らしき文句をならべ、佛を偽り人を欺く不敵の曲者、彼こそ西塔の武藏坊辨慶、鎌倉殿の御説によつて、擲け捕つたる富樫の介がよも僻事ではあるまい

義經 ムウ、あの先達を辨慶なりとは、色黒く背高く似たるを以つての故ならんが、安宅の關には烏亂の判断それとも又正しき證據あつての事なるか 富樫 ハハ、ハ、天下の沙汰に批判の掟あるべきか、辨慶が繪圖、これを見よ 竹 一軸さつと押ひらきト、手文庫の中より 繪圖を取出し 面う付まなざし手足の作り、丈けは六尺二寸、左の眼尻のほくらまで、寸分違はぬ研かな證整何と述べようぞ。



# 創意と近代的感觉

西田眞三郎

近年は殆んど旅に出て大阪を見棄てた観のあるのは遺憾ですが、延若はもつとく大阪で芝居をして貰はなくてはならない人ではないのでせうか。幸ひ先代延若追善劇が楔機となつて、そうした事になれば大阪の劇壇も大いに賑かになるわけです。鴈治郎が始終大阪に居るから延若に用はないと言ふは

ど現在の大阪歌舞伎は強力でない筈です。尤も延若一枚を加へて俄然新局面が展開されるわけもなさそうだが、雀右衛門、多見藏らの没して以来の大阪歌舞伎劇壇の寂寥は日に月に加はつて来たやうです。歌舞伎の現状を嘆き且つ奮起して、福助、魁車、壽三郎らが「かなへ會」に鼎座した意氣は壯とするに足るが、尙且つ未だ一變を得るに足らない現状には、人は知らず、私は不満で堪らないのです。鴈治郎對延若の間に興行政策上何かとありとすれば鴈大阪に在る時は延旅にあり、鴈旅に在らば延大阪にありといふ交替制でも悪くはありません。今度の先代延若頌讚劇はこの意味に於てさへも頗る有意義だと思ひます。一緒に居なくてはならない人が離れてゐるといふんな噂が起つものです。幸ひ今度の合同でさう

した艱憂が解消されて何よりも結構です。延若が、今度繪本太功記の光秀を演ると聞いた時、私は往年松島八千代座で見た延若のそれを想ひ出しました。それは延若一流の創意と技巧に依つた演出で、何んでも例のひつそぎ槍のきつきき心傍の圍爐裏の火で焼いたのを更に鋭く磨きをかけるやうな仕事だつたと思ひます。

一舉手、一投足に約束の絡んでゐる歌舞伎の型の上から言へばそれは別して珍らしいことで、褒貶相半ばしたやうでしたが、考へて見れば頗る合理的なことだつたのです。

大正十四年の五月浪花座の改築記念に延若が「實録先代萩」の淺岡を演つた時、延若は斯う言つた意味の事を言ひました。

淺岡の役は昔からよく泣かねばなら

ぬ役であるが、私は泣かない。勿論  
壯では大いに泣くのですけれど懷紙  
を出して涙を拭く科は出来るだけ省  
きました。そして千代松を歸してか  
ら感極つて泣く所で初めて懷紙で目  
を押へることにしました。

以上は延若の創意であつたかなかつ  
たかは別問題としても、一々首肯出来  
ます。當時は市藏の小子郎の方が餘程  
泣き虫だつたやうに憶へてゐます。

「佐倉義民傳」の宗吾なども淺岡の  
イキで、泣くまいとすることに依つて  
おさんの悲哀を深めて、そこに名主惣  
代としての意氣を出さうと努めると言  
つた風に、延若の藝には多分に理が含  
まれてゐます。

創意とそれに伴ふ技巧の上から觀れ  
ば延若も今日の凡ての俳優がさうであ  
るやうに自らリアリズムの道を辿つて

### 實川延若を語る

來てゐる俳優です。

如何なる役でも一應はこなして見る  
といふ猛演ぶり、靜かにその趣味に  
浸らしめると云ふ魅力はないが、流水  
に躍る銀鱗といった潑刺さがあり、意  
氣があり、霸氣があります。

紙治もやり、梅忠もやるが、鴈治郎  
の靜的なのに反して延若は動的で、

その可否は別問題ですが延若が比較的  
新作物に成功してゐるのは彼の演技に  
對する解釋が常に理論的であるの結果  
ではないでせうか。歌舞伎劇に對して  
も比較的モダンズムを注ぎかけて行く  
といふ風が多分に見えます、言はず彼  
は歌舞伎の衣裳を着けた近代的な名優  
だと思ひます。

## 延若君

坪内士行

「おい延若君、一杯飲もか」と呼び  
かけても、向ふ様では、「あんな誰や  
？だしぬけにけつたいな」と答へるで  
もあらうほど私は延若君とは馴染がな  
い。だから一杯飲もかと呼びかけはし  
ないが、呼びかけてもいゝ様な氣のす  
る程度に打ちとけた感じを彼に持つて  
ゐるのは事實だ。時折り電車などで婦  
人同伴の彼を見かける度毎に、關西の  
ボン／＼に特有な雅氣と我儘さを思  
はせられて、いつも心に微笑を含んで  
眺めるのであるが、或意味に於て、彼  
は、六代目菊五郎の持つ傲慢さと茶氣  
とを、關西ナイズして持つてゐる男の  
様に思ふ。大阪にも福助や魁車や壽三  
郎の、所謂鼎會の三足を始め、名優雲  
の如しではあるが、その中で一番朗ら  
かさを持つてゐるのが延若であり、そ  
の點で最も近代色を帯びた俳優と云へ

## 實川延若を語る

るのではなからうか。但し、朗らかと云ふ點に於てのみ近代的なもので、はたして彼の朗らかさの智的内容までも近代的なかどうか、それは私には分らない。大阪商業界の順調に育つた不良老年ボン／＼には、たとへばアメリカのナンセンス映畫に出て來る人物のやうに朗らかな手合がよくあるが、頭の中は空つぽの人が無いでもない。我が延若はそんな老年ボン／＼とは違つて居てほしい。いや、少くとも最近數年間の東京での修行は、元來賢こさうである彼を一層賢明にしたに相違ない。とすれば鬼に鐵棒である。

その時の私自身の心境がどうであつたか忘れてしまつたが、所作事はいざ知らず、他の事は何でも出來さうな彼であり、喜劇——と云ふより、もう一つ突込んで——萬歳でも、おそらく魁車よりもつと朗らかになりうる彼であらう事を考へる時、私がバラエチー役者として活躍してくれと望んだ事は、あながちに彼を軽く見たものでないどころか、これから新しく生れるであらう所の新演劇形式のチャンピオンとして彼に期待する事多いと云ふ意味になるわけである。

當分大阪歌舞伎座を彼に與へよ。彼を中心としてあらゆる種類の藝人俳優を集めよ。そしてあの大劇場に向くバラエチー式の劇形式を試みよ。そこには片々たるレヴューやエノケンを遙に凌駕する深みのある規模の大きい新し

い娛樂ものが生れ出るであらう！と責任の無い私は考へて居る。

## 實川延若を語る

菱田正男

上方歌舞伎近世の名優先代實川延若を父に持つ當代の延若はまた關西劇壇の重鎮である。御大膽治郎の偉大なる存在にくらべて比較的不遇にあるが彼延若の有つ獨特の巧味はまた見のがすべからざるものがある。私が延若を一番最初に見たのは勿論延二郎時代で、今からザツと二十年ほど前だつたと思ふが、南座の顔見世で、たしか「奴唄廊春風」の時、奴唄に扮した丈が妙にハツキリ印象づけられたのにはじまる。そして丈を見た今日での終りは昭



和七年三月の南座の東西合同大歌舞伎で「假名手本忠臣蔵」と「芦屋道満大内鑑」が出た時、師直、勘平、保名、奴彌勘平をやつた時だ。その間いろいろ舞臺を觀て、つねにその演技には相當敬服してゐたものである。藝壇東京における活躍ぶりは直接觀るの機に恵まれなかつたが、新聞に雜誌に、或ひは人傳で知つてその奮闘ぶりを大いに喜んでゐた。昨冬京の顔見世に左團次の「國芳の出世」が出るのと噂を聞いたので、もしかしたら延若の馬方が見られるのではないかと心ひそかに期待してゐたのだが、これは私の勝手極まる想像に過ぎず、その狂言はお蔵となり、又丈の舞臺を見ることが出来ぬといささか悲觀してゐた矢先き、その延若が今度久しぶりで歸阪し、而も三月の歌舞伎座で亡父五十年追遠興

實川延若を語る

行に併せて延二郎、延之助二子の初舞臺披露をするといふ吉報だ。延若の得意や思ふべしで、同時に關西歌舞伎の盛衰に非常な關心をもつ私は大いに欣こびに堪えない。そして所謂本場仕込みの、東京土産の鍛えあげた腕の冴えを見せてくれるであらうことを豫期しそれを一日も早く見たいと思ふ。「玄治店」の蝙蝠安、「小さん金五郎」の金五郎、どれにしても丈の舞臺を久しぶりに見るだけに懐かしい。この際丈に希望したいのは舞臺における鷹治郎の後繼者として倍舊の健闘をつゞけ關西劇壇の將來を背負つてもらふことだ。東京劇界に比べて甚だしく活氣のない關西梨園に萬丈の氣焔を吐く者は二三しか屈指出来ぬ、それだけにこの際丈に望むこと切である。

尚ほ序だが今回先代延若追遠興行

を好機として、宗十郎、璃寛など上方劇壇名優達の追遠興行がひきつゞいて近き將來に必らず行はれるであらうことに希望と期待をもつてゐる。これこそ關西に於ては九代目團十郎追遠以上に有意義なことだから。

一九二二

延若雜話

西尾福三郎

久し振りで延若中心の芝居を見る事ができる。

京阪歌舞伎不振の聲をきくのも毎度の事であるが、願はくばこの有意義な企てを機會に、従来とかく京阪の舞臺に疎遠勝だつた河内家をもつとく活躍させて欲しい。

實川延若を語る

誰とでも調和する多面な藝質をもつ内家は、その爲許りでもあるまいが他流試合の芝居が餘りに多過ぎる。一方では決つた女房役者がないと云ふ不運もあるにはあるが、鷹治郎既に古稀を過ぎた今日、残る唯一の延若がこの状態では愈々上方歌舞伎の前途が不安にたへない。

きく所によると今回は延若の所存とあつて先代追還の口上も辭退し、延若の名跡も兩子成長の後その技倆を確かめての後迄一時中絶させるとも厭はぬ覺悟の由、何れも結構な決心と申上るを憚らない。眞實の理由は奈邊にあるか知らないが、ともかくも目出度い兩子の立出に際し、乃父のこの慎ましく嚴しい所存の程は、千萬の空華で飾るよりもどれだけ有意義か知れないと思ふ。

先代の残した響れを弱し草に、次代の鳳雛を従へて久々登場した今回の延若の舞臺こそ、色んな點で重大な意義を示すものと自分は思つてゐる。

一昨年十月歌舞伎座の柿茸落し興行に晝夜の一番組物新作に秀吉と道頓をその他淡太郎と南郷を務めて以來、約一年半振りのお目見得である。その間の主なる役を拾つてみるとざつと次の通りになる。

東京歌舞伎座の二月狂言に實録忠臣藏の卜使、戀の湖の助七、新作實朝と義時の義時。三月明治座で大杯の直孝すしやの權太、新作鼠小僧の同心と福松の父。四月東京劇場で修善寺物語の頼家と梅忠。五月明治座で豚姫と堀川の傳兵衛と南郷、かつばれ坊主。六月歌舞伎座で宇都宮城の興四郎と伊豆守博文と李鴻章の石黒と伊勢音頭の喜助

九月歌舞伎座で安宅の辨慶。十月歌舞伎座で天下茶屋の彌助と東間、それに女治店の多左衛門。十一月東京劇場で彦三の六助と實説忠臣藏の大石、國芳の出世の馬子。

本年一月は同じく東京劇場で續篇忠臣藏の大石と馬千丑五郎、梅忠の孫右衛門と忠兵衛に江戸城總攻めの勝。

大體以上のやうな活躍振りで、せめてこの半分でもこちらで見せて貰へたら關西劇場も大分活氣づくのだが。

何卒これを機会に久しく出ないお家藝の珍らしい所を續々見せて貰ひたいと思ふ。

お家藝と云へば、先代の當り狂言小さん金五郎が演るのは珍らしい。雁のたより等と共に上方情緒の豊かなものである。

當代延若によつて傳承される先考の

面影の内、特に愛嬌のある所や、白廻りの長く引く所、かすれ氣味の中音で潤はひのある所等彷彿たる點があるとの事。特に當代は長白ふの抑揚自在な所に獨特の長所がある。

それと共に芝居言葉としては難物と云はれる京訛りを自在にこなす點で、恐らく延若の白ふは日本唯一であらう西郷と豚姫のお玉の言葉や、乳費ひの四郎二郎の軽い捨白ふにも京都の色が生々として盛られてゐる。

新しい御時世と共に純粹の江戸言葉や大阪言葉は漸時亡んで行きつゝあるとは云へそれらはまだ脚本や歌舞伎芝居の舞臺の上でだけは昔のまゝに保存されてゐる。それに較べて京言葉は書き物の上でも舞臺の上でも殆んど全く影を没して、僅かに喜劇のツマに使はれて笑ひの薬味を務めてゐる位のもの

である。

さうした中で延若の持つてゐる京言葉の味は珍重すべき價値を有するものである。

太功記十段目と玄治店とが同時に出来る。

延若の年表めいたものを繰つてゐると偶然明治三十六年の京都の歌舞伎座(當時道場の芝居と云つた今の映畫館歌舞伎座)でこの二つが並んで、役割も十次郎と蝙蝠安が延若である。

十次郎は極めつきの當り役、最初織袴でのれん口の出があり、二度目は物具つけた初陣姿の門出、三度目傷き戻つて落入る迄、派手な内に愁ひがあり、和か味の底に凜とした意氣がある花に喩へるなら光秀と云ふ拮据とした枝に宿つた一輪の梅花、それが蕾満開、落花と三段の變化を一場の内に見

せるのだから、演ずる人も見る方もこんな氣のいゝ役はない。延二郎時代に帝劇でこれを演じた時には萬事に和か味の勝つた十次郎として、殊に初菊との別れに兜の忍び緒を切つて渡す所が珍らしいと云つて大好評を博した。

恰かも時を同じくして文樂でも古靱の極めつきの十次郎が語られる由、併せ見るのに絶好の機會である。

蝙蝠安は京都初演の時には團藏の與三に對してその兄貴分としては一寸無理があつたらしい。

しかし唯一の安役者松助亡き今日、菊五郎、吉右衛門、友右衛門と最近の安役者を想ひ出してみると、この三者に求め得ないものが見られさうな氣がする。

—一九三四・二・二六—

### 實川延若を語る



歌 舞 伎 座 狂 言 案 内

第一 壽生立會我

大藤野連中  
竹本連中

岡鬼木 那作  
吉川 潤方 表 考案

工藤祐經に父を討たれた會我の一滿、箱上の兄弟は、母の戒しめにて、弟箱王は箱根権現の別當行實の御弟子となり、兄は會我に離れん、悲しみ。若き日の會我兄弟が、父の仇敵を報するまでの生行路。

(場割箱根権現裏山の場、箱根道地藏堂の場)

不動 明王  
鈴 羯羅童子  
制 叱迦童子  
箱 根 権 現 別 當 行 實  
會 我 十 郎 祐 成

同 箱 王  
家 團 三 郎  
所 化 空 山  
同 空 谷  
北 條 四 郎 時 政

第二 小三金五郎 三場

父のゆづりの元結も、油だらけをかへりみず、とりいだしたる五十年、その追善のかたみの髪結、と現延若が切代を徳ぶ出し狂言。

(場割安居天神の場、福屋離座敷の場、勝曼坂の場)

金屋橋の金五郎  
廣瀬屋 新十郎  
實は木津屋六三郎

夜の部

奈良屋 權左衛門  
同 草屋 左衛門  
同 娘 お崎

同 下女 おその  
女 髮 結 お鶴  
弟 子 お千代  
福 屋 仲 居 おきん  
同 女 中 おさわ  
仲 村 居 おさわ

大 村 屋 おさわ  
駕 詣 政 之 助  
參 詣 政 之 助  
茶 店 の 小 さ ん  
額 の 小 さ ん

第三 道行初音の旅

義經千本櫻の初めて竹本座上演になつたのは延享四年十一月で竹田出雲、並木千柳の合作初音の旅は大和源九郎狐の傳説を脚色せるものである。劇的舞踊の随一と稱せられる關西特有の所作事でありませう。

(場割吉野山の場)

佐藤四郎忠信實  
は源九郎 狐  
早見の 藤太  
靜 御 前

第四 南 部 坂 一 幕

時めいた春も背に冬枯れて、今

楠 三 郎  
延 太 郎  
實 三 郎  
仙 郎  
助 郎

實 三 郎  
仙 郎  
助 郎

實 三 郎  
仙 郎  
助 郎

實 三 郎  
仙 郎  
助 郎

實 三 郎  
仙 郎  
助 郎

實 三 郎  
仙 郎  
助 郎

實 三 郎  
仙 郎  
助 郎

實 三 郎  
仙 郎  
助 郎

實 三 郎  
仙 郎  
助 郎

は花もない南部坂の假御殿に、淺野内匠頭の後室瑤泉院が戸田の局等と佗住居をしておます、大石内藏之助良雄は日頃の望も叶ひ、愈々今宵宵良郎へ討入りをすることになつたので、その暇乞にやつて來ます。

(場割瑤泉院假御殿の場、回廓外の場)

大石内藏之助 應 治 郎  
清水 一角 延 若 郎  
後室瑤泉院 梅 幸 郎  
戸田の局 魁 車 助  
侍女 お梅 鷹 助

第五 與話情浮名横櫛

源氏店の場

有名な江戸前の世話狂言です。上總水更津の濱に端を發して、お富、與三郎の戀の遠引。源氏店の名臺詞があります。

(場割鎌倉源氏店の場)

向 疵 與 三 郎 羽 左 衛 門  
編 蝠 三 郎 延 若 門  
和泉屋多左衛門 訥 子  
番頭 藤 八 關 右 衛 門  
丁稚 丁 松 延 丸  
下女 およし 梅 朝  
多左衛門妾お富 梅 幸

多左衛門妾お富 梅 幸

第六 奉納男繪馬

常盤津連中

上の巻 奉納男繪馬  
下の巻 奉納男萬歳  
食 薩 南 北 作

太平の世を納さむるかけ額の、武者繪をこゝに五條橋、開くも日の丸に、すがた勇まし筆のあさ、と牛若丸と辨慶前へ出て、よろしく振りあり。それから、日つぎの御子の千代よろづ萬歳を花やかに、雀おどりの總舞になりませう。

武藏坊 辨慶 右 三 郎  
牛 若 丸 長 三 郎  
雀 松 吉 團 次  
雀 踊 右 團 次

雀 踊 右 團 次

雀 踊 右 團 次

雀 踊 右 團 次

雀 踊 右 團 次

雀 踊 右 團 次

後記

花にききかけて、先づ松竹座に吉例春の踊りが開演されました。「春は花から踊から」の標語にふさはしい絢爛の舞臺を展開させて居ます。

×

明治の關西劇壇に名優の譽高かりし初代實川延若の五十年追善興行は、衆目を集めて三月の歌舞伎座へいよく開演致しました。

昨年三月開催の岡十郎追遠興行にも比すべき豪華な番組は、大阪劇壇に關心を特つ程の人々に大きな感激をもたらしたことです。

×

さて、そこで初代延若追善號として充分御期待に添ふべく編輯にとりかゝりましたが、途中病氣に見舞はれて、當初のプランに大きな打撃

をこうむりました爲、内容の不備な點が多々ある事と存じます。加ふるに發行日等の遅延で大變御迷惑を相掛けました。讀者諸君にお詫び致す次第です。來月は充分健康をとり戻して一増の精進を致す考へて居りますれば、何卒御容謝願ひたいと存じます。

×

「劇壇評論」に就いて各方面より非常に熱心な拔書を多々いたゞいて居ります、御叱責、御鞭撻共に結構と存じますから、何卒今後一層の御高示を仰ぎ度く存じます。

×

村岡理喜氏の「千代萩の映畫」に就ての参考御寄稿は紙面の都合上掲載を見合せましたが、こうした原稿は大變結構だと存じますから、一應大橋氏の方へ轉送致し御参考に供し度いと思つて居ります。

—— 滿彦生 ——

昭和九年三月一日發行

月刊「道頓堀」第九年 第九十號

◇誌代は前金でお拂ひを願ひます。  
◇郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。  
◇御相談の上廣告掲載の需に應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社  
大阪府北區中之島二丁目  
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部 金參拾錢 (郵便五厘稅)

昭和九年二月廿八日 印刷  
昭和九年三月一日 發行

大阪府南區難波新地三番町  
發行所 鳥江 鏡也  
共同編輯 山上 貞一  
印刷所 道頓堀社印刷部

大阪府南區難波新地三番町  
(大阪歌舞伎座内)  
松竹興行株式會社大阪支店  
發行所 道頓堀編輯部

# 御園

# つぼみ白粉

白色  
肌色  
黄色

四〇センチ

目下新設賣披露のため御買上毎に洩れなく御園フェースペーパー冊  
進呈更に壹萬名様へ抽籤にて壹等金指輪より七等迄の景品付賣出し中

近代美を欲する方……………は  
個性美を生かしたい方……………は  
お使ひにならねばならぬ白粉です  
ツキ・ノビ良くお化粧崩れのせぬ  
お召物を汚さぬ真に理想的な  
優秀品です……………是非お試しを！

悉くの女性に

捧ぐ！

遂に發明された

今日からの白粉



伊東胡蝶園

春が来た  
春が来た

どこにいた

麗らかなの春肌

あなたの頬に  
あたしの肌に  
薫るクラフの春が来た

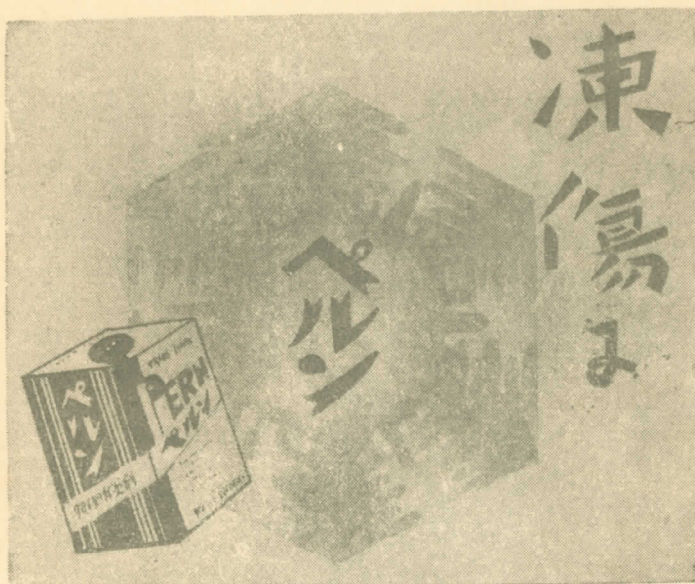
# クラブ美身クリーム

- ・フレイヤケをふせぎ。
- ・生地からの美を養ふ。





# PERN



適應症

凍傷、皮膚裂瘡（ヒビ、アカギレ）  
火傷、汗疹、濕疹

ペルンノ長所

- ◇ 塗布ニヨル爽快ノ氣分ハ他ノ追隨ヲ許サズ
- ◇ 膠樣質ガ主成分ナレバ其成分ガ沈着シテ表皮ノ皮膜形式ガ行ハレ皮膚ノ保護ニ申分ナシ
- ◇ ワセリン、脂肪類ヲ含マザレバ塗布後、食器食料品ヲ取扱フニモ不潔、惡臭等ノ附着ノ憂ナキハ本品特長ナリ

容	量
一五cc	三十錢
三〇cc	五十錢
一〇〇cc	一圓五十錢

大阪市東區伏見町三丁目

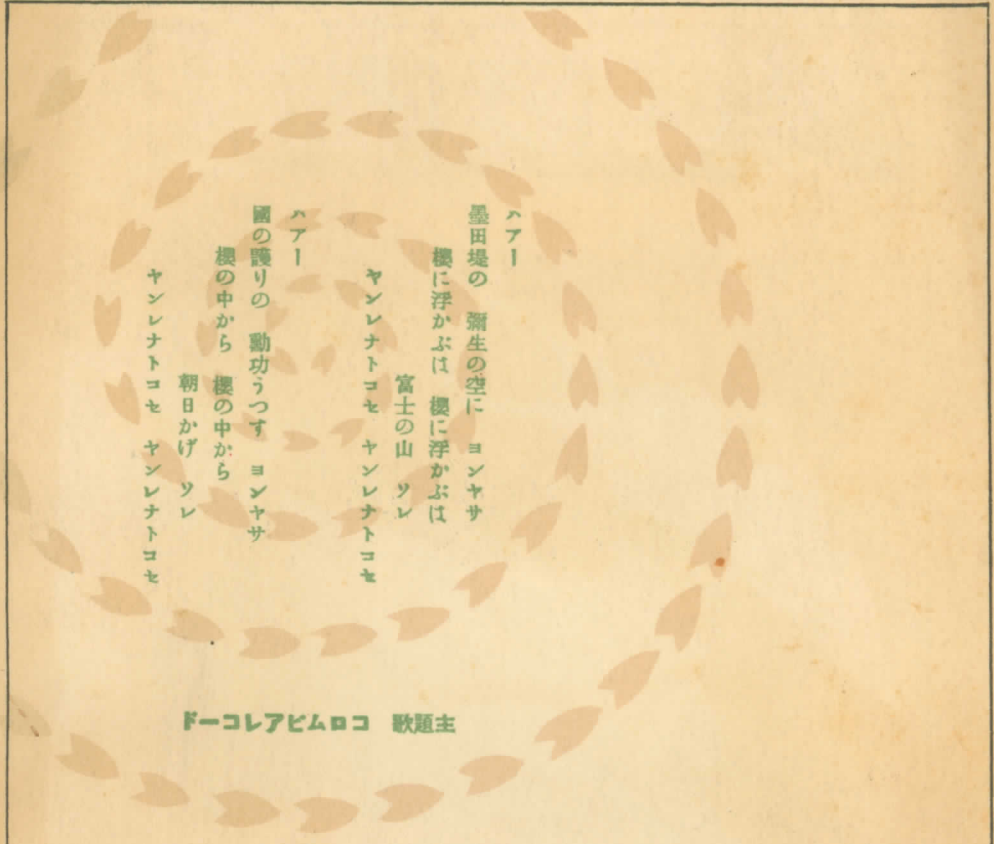
製造發賣元 光榮商會

電話本局三三一五番  
振替大阪三三一七番

昭和二年十月廿五日 第三編 東京 月刊 一元  
昭和九年三月一日 發行 一元

「道頓堀」 第九十輯 第九年三月號

一部 金 拾 錢



ハア

墨田堤の 彌生の空に ヨンヤサ

櫻に浮かぶは 櫻に浮かぶは

富士の山 ツレ

ヤンレナトコセ ヤンレナトコセ

ハア

國の護りの 勤功うつす ヨンヤサ

櫻の中から 櫻の中から

朝日かけ ツレ

ヤンレナトコセ ヤンレナトコセ

ドーコレアビムロコ 歌題主

# 頭音らくさ

一 キート・ルーオ  
版華豪督監助之平所五  
トスヤキ・グツビ超田蒲